



TITLE:

ラオ人社会をめぐる民族・国家・地域

AUTHOR(S):

林, 行夫

CITATION:

林, 行夫. ラオ人社会をめぐる民族・国家・地域. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ: 総合的地域研究の手法確立: 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1996, 26: 30-78

ISSUE DATE:

1996-11-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187638>

RIGHT:

ラオ人社会をめぐる民族・国家・地域

林 行夫

はじめに

- 1 「ラオ」の所在
- 2 差異化されたラオータイの「民族内関係」ー
- 3 イサーン
- 4 東北タイの民族間関係におけるラオ
 - (1) 東北タイの先住民
 - (2) 隣人関係のなかのラオ
 - (3) 行商・コメ品種にみる民族間関係

むすびにかえて ー民族間関係のなかの地域ー

はじめに

タイ国に留学して間もない1981年12月に、東北タイの農村Dを初めて訪れた。ある初老男性が舌足らずな標準タイ語で話そうとする筆者を凝視しつつ放った言葉がある。「ラオ語を使え、ここはラオ人の村だ。『シャム語』(kham sayam)はいらん」。まだ耳慣れない彼の日常語は語気荒く、叱りつけられたように聞こえた。結局そこに1年近く住み、その後も毎年のように東北タイのラオ人集落を訪れている。古老たちの追憶のなかにラオの故地が見え隠れするうち、それぞれの集落を「タイ農村」というよりも、ラオ人が乾燥地のコラート高原上に歴史的に切り開いてきた生活空間としてみるようになった。

1990年、ラオス人民民主共和国へ調査で正式に入国する機会を得た。ようやくラオの「古里」に飛び込める。そんな感慨と昂揚もあって、到着後の歓迎会めいた席で「私はあなたがたラオのキョウダイのところでお世話になってきました」と挨拶したように記憶する。ところが会の終了後、一人のラオ人官僚が教諭するように静かに語った。「彼らはイサーン(東北タイ人)です。あなたの言葉のようにラオ語ではない東北タイ語を話す人びとです。彼らにラオの伝統文化は継承されていません。自国をもたず、タイ国に依存してきた人びとです。同じようにモチ米を食べるが(イサーンの)生食の習慣はラオのものではありません・・・」云々。その年に訪問したラオ人集落でも、東北タイのラオに関心を示す人と出会うことはなかった。

ラオスで二度目の調査を終えた1991年の暮れ、帰りにバンコク経由で数年前から訪れていた東北タイはウボン県の一村Nに立ち寄る。三十路を迎えた村長の娘さんが、近所の友人を自宅の軒先に侍らせて市場にだす野菜の選別をしている。数日前まで寝起きしていた対岸の場所が「外国」と実感できないままにその輪に入る。会話がぎこちない。南ラオスとウボン周辺のラオ語は発音、抑揚とも似る。むこうで慣れた調子が訛って聞こえるのかと思いつつ「もうラオ語は忘れちゃったのかい」といつてみた。すると、娘さんは大笑いしながら「何？ラオ語だって。きいたかい。ラオ語だってさ。ここの言葉はイサーン（東北タイ）語よ、ラオ人なんていないよ」。その時、電気仕掛けのようにしてまる10年前のことが思いだされた。

重ねてこの種の個人的経験を記しても、何ごとかが実証されるわけでもない。しかし、上記のような二国に跨るフィールドでの文化衝撃が本稿の端緒をなしている。われわれはしばしば地図上に民族分布や宗教文化圏を括る。それによってみえてくるものがあるからである。だが同時に、覆い隠されてしまうものもある。それぞれの範囲を典型的に物象化し、たとえばラオ人という言語集団には、国境を越えて同じ民族文化的アイデンティティが共有されているかのような幻想を、調査上の前提としてしまうことが多々ある。現実にはいくつもの異なった境界が生まれ、それらが立体的に交錯しつつ生みだす「場」が存在する。同一国内の同一名称の民族にも、生態環境や隣接する民族、地方政体や国家など外部の関係においてさまざまに異なる生産技術や言語、文化、社会の様式がみられる。民族内部での政治的葛藤や紛争は、当事者に異なった帰属意識をもたせている。民族ないしエスニシティの特色を唯一の指標として異文化研究に使用することの無意味さが指摘される由縁である〔cf. 前田 1989〕。

異文化をその風土ないし「場」において、言い換えればその「在地性」において捉えようとする時、客観的分析指標としてもちだされる「民族」は使いものにならない。同時にこの認識は現場で顕在化する「民族」の生成過程の解明へと観察者を誘う。民族分布図の制作者や筆者がそうするように、同一言語集団とみなされた成員どうしの間においても、当該の人びと自身が、自己（および関連する他者、ないし世界）を特定するためにさまざまなレベルで差異化を試みつつ、類型化し物象化する。民族はあたかも遺伝形質的な「人種」のごとく現れる。しかも、この閉じられた視座設定から生じる指標（他者としての民族）は同時に、集落を取り囲む森林世界や異人にたいするコミュニケーションの様式をなし、「仲間」内で語られ、見知らぬ訪問者の前で実演されることでそれぞれの「場」を生みだす梃子となっている。理論上、無数のヴァージョンを生む民族は、「人と空間とシステム」としての地域、さらには階梯的な国家政体の編制過程へと連鎖するような、自他を差異化する方途である。とすれば、民族は何らか

の尺度や指標とされるものよりも、それぞれの「場」で指標とされていく過程の力学について検討されねばならない現象となる。観察者の認識作用を含め、人びと（他者）を分類＝差異化する規準は、常にそれを行う者に埋め込まれた何等かの歴史的な在地性を帯びる。そして一般常識となった差異化の作法こそ、個別の文化を代表する。筆者にラオ語を話せと迫った老人は、95年に他界した。彼が中部タイの世界と、自らの文化的アイデンティティを区別するためにラオを名乗っていたとすれば、彼が生きた「地域」は今日「イサーン＝ラオでない」とする人びとと同じものである。以下は、その内実を通時的、共時的に探ろうとする試みである。

1 「ラオ」の所在

言語集団分類や民族誌では、ラオは言語文化的にタイ語族であるとともに、独立した民族名称として存在する。ラオとは、今日標準的な言語集団の分類ではタイ語諸族 (Tai speaking people) のひとつになる。李方桂 (Li Fang-kuei) の三分法にしたがうとタイ・カダイ系諸語に属するカム・タイ語群チュワン・タイ語群の、南西タイ諸語に分類される言語の話し手である（紅河より南西部のタイ族）〔三谷 1984: 65-66〕。方言、地域的差異からさらに多種多様なラオを区別することができるが、以下では東南アジア大陸部でメコン川中流から下流部にかけの地域、すなわち今日のタイ国の東北地方とラオス人民民主共和国（以下ラオスと表記）の主要住民で、ラオと自称あるいは呼ばれてきた人びとの総称として使用する。その祖先は14世紀半ばに仏教王権に基づくムアン型国家（ラーンサーン王国）を建設し栄えたが、18世紀初頭には三国、四国に分裂し1779年に隣国シャムの朝貢国、そして前世紀末にフランスが植民地化する過程で今日の二国に分かれ住むようになった。タイ国側に移住したラオにはふたつのタイプがある。ラーンサーン王国ないしその分裂後のラオの王国での内紛や政争から逃れ、東北タイのコラート高原上に拠点を築いていく移住者、そして18世紀以降、タイのラタナコーシン王朝成立後に戦争捕虜として強制移住させられて現在の中部タイや東部タイに住むことになった人びとである〔Srisakara 1990: 278〕。民族誌上では、エスニシティの特徴として山間盆地、低地平野、高原部で水稻耕作を営み、身体や集落の境界と関連する精霊や魂の観念とともに、出家と戒律主義を旨とするスリランカ系の上座仏教を信奉する人びととして記述されている。また、タイ語族全般に共通するが、河川ぞいの交易に長じ、その「場」を創って東南アジア大陸部で先住民族より優位にたった民族としても描かれてきている。

ところが今日のタイ国では、前世紀末以来、国内での「民族籍 chuachat」ないし「民族 chat-tiphan」としてのラオを制度上認知していない。国語辞典上の意味も隣国ラオス人民民主共和

国のタイ系住民をさす(1)。現在のラオスでラオといえは一義的にはラオス国民一般をいう。1899年、時のフランス植民地政府は民族名ラオの複数形であるラオスという国名を採用した。社会主義体制以前に公刊された『ラオ語英語辞典』は、ラオの語義に①民族、国家の名称、②彼、彼女をさす代名詞、③サンスクリット語起源としての大きい、高い、をあてている[Kerr 1972 vol.2: 1016]。だが市場開放政策採択後に出版された『現代ラオ国語辞典』は、ラオの語義を、①インドシナあるいは東南アジアに位置する高度な文明を有する国家、ひとつの民族国家(sat)、②大きい、高いとし[Thongkam 1992: 661]、個別民族名の意味が後退している。

ラオスはビルマ、ベトナム、中国と異なり政府が一元化した認定「民族 sonphao」の詳細を正式には公表していない。ただし、地形の高度に応じて三つの住民呼称があり、それぞれにラオが付されている。低地で水稻耕作に従事するタイ・カダイ系諸語の話者(本稿でいうラオ)をラオ・ルム(低地ラオ Lao Lum)、山腹で焼畑耕作する主としてモン＝クメール系諸語の話者をラオ・トゥン(山腹ラオ Lao Thoeng)といい、山頂で換金作物栽培に従事するメオ・ヤオ語、シナ・チベット語を話すのがラオ・スーン(山頂ラオ Lao Sung)である。五か国と境を接する内陸国で国土の七割が山と高原に覆われたラオスでは、住民の連帯と社会統合を目ざしてこの分類を採用し、1950年以来日常においても事実上の民族指標となってきた(2)。

政府関連部局は民族の掌握とその政策に苦慮している。1975年の解放以後、三分法にかわって個別民族名を採用すべしとする立場とそれは統合を揺るがす原因とみる派との不一致もある。以前は全国で820の民族が認知されたともいわれるが、1985年に人口センサス・民族構成調査が実施された後は、その数は内容が示されぬまま68ないし65とされていた[Stuart-Fox 1986, Cordell 1991: xvi] (3)。そして、現在では43にまで整理されている[Khambai 1991: 24-27]。そのセンサス結果に基づくと明記する(観光者向けの?)社会科学院編『ラオス諸民族巡り』は47と記載しつつ、個々に記載されている民族名称の数は42である[WTS 1992]。本書の序文にあたる箇所に「さまざまな呼称をもつ諸民族は、従来ずっとラオス人(Khon Lao)を自称してきた」としつつ、民族文化を保持することとラオス国の統合の問題とは矛盾しない、と何度もくり返されている[WTS 1992: 3]。本書が刊行されるに先だつ1991年3月、人民革命党第五回大会が開かれ「民族保護政策」が採択されている。民族文化振興政策と連動する表現だといえよう。いずれにせよ、本書はラオスの言語集団を【表1】にみるように6つ(Lao Thai ラオタイ語族、Mon-Khmer モン＝カメーン語族、Mong-Yao モン・ヤオ語族、Tibet-Phama チベット・ビルマ語族、Wiet-Muang ウィエト・ムアン語族、Han ハーン語族)に分類している。

1995年にラオスで刊行された民族の比率を示す別の資料に『国家地理局ラオス地図集』がある[NGD 1995]。同書は言語集団を四語族(ラオ・タイ、モン・クメール、モン・グ・ヤオ、チベット・ビルマ)に分けて、民族集団総数を46とする。ラオ・タイ語族を6民族からなる集団としている点は上記表と同じであるが(但し個々の民族名は記載なし)、同書は1993年時点の全国人口を447万4千とするのでラオ・タイ語族は3百万以上(68.28%)となる。上記表のようにラオが占める割合は探りようがないが、ラオ・タイ語族の伸張を印象づける記載の仕方である。ところが他方、同年に刊行されたフランス人による調査報告書は119の言語集団を区別し、ラオはタイ・カダイ系諸語の25集団のひとつで推定人口を160万としている(タイ・ルー12万5千、タイ・ダム5万、タイ・ヌア3万5千人〜と続いて記載される)[Chazee 1995: 33-56]。ここでは、上記表での数よりもラオは減少している。

その申告の模様を現場で経験した者には、政府当局が公表する民族別人口の統計ほど、統計の虚偽性を確信させるものはない。にもかかわらず、上記のような刊行物が表記する「ラオとされる」人びとの趨勢を、当地での通念を示す概数という意味で整理しておいてもよいだろう。タイ国のマヒドン大学民族言語地図プロジェクト(第1期1992-95年)が公表する調査結果によれば、東北タイでのラオ語使用者は11135493人という[Suwilai and Naraset 1996: 4; chart 2]。これは東北全県人口約2千万(1992年時点)[Wilai et al. 1994]の約7割にあたる。タイ国内人口(5770万/同年)の2割強を占めるが、首都バンコク人口の3分の1を占めるとされるラオ語使用者を含むと、タイ全土でおよそ1500万と推定される。ラオス側のラオは、前述のように160万から200万である。冒頭の「ラオではない」とする者も含めて、二国に跨るラオ語使用者の総数はおよそ1700万となる。タイ国でのラオが同国の主要構成民族のひとつでさえあるのにたいして、ラオス国内での多数派言語集団であるラオは、多く見積もっても東北タイのラオの2割にも及ばない人口勢力である。しかも、その主たる居住空間は国土全体で2割程しかない低地平野部に限られる。タイ国側のラオに自前の国家はないが、国土面積の3割を占めるコラート高原に集住する。前者は、面積が小さくとも国家という最大限の政体領域をもつのに対し、後者は「地方」をそのホームランドとしている。

2 差異化されたラオータイの「民族内関係」ー

特定の地域と住人の呼称としてのラオは、16世紀半ばにポルトガル人によって記録・紹介されたことになっている[Yule 1902(1886): 504]。しかし、西欧列強が急速に当地に接近した前世紀に数多く残された叙述は、ラオは当時のタイ(シャム)人だけが彼らにたいして使う

呼称として存在するとしている。ラオは他称であって自称ではない。仏領以前のラオス（ラーンサーン王国）における最古の人口センサスとして、1376年にファーム王の息子であるウン・ファンが行ったという「統計」を紹介する文献は、調査方法や領域範囲も不明ながら18歳から60歳までの男子壮丁を対象に「ラオ・タイ Lao Thai」が30万、「非タイ族 Non Thai」を40万と区別して記している [Halpern 1964: 2]。原典の所在も含め未確認であるが、タイを指標としていたらしいことは推察できる。植民地ラオスの誕生後しばらくして各地のタイ族を訪問調査したドッドは、中国、トンキン、ビルマ、シャムに住むラオ人が、自らをタイとよんでいたことを記している。彼によればタイとはシャム、ラオを含む包括的呼称である。そして、タイは中部地方のシャムを除いて基本的には内陸国の住人であり、ラオスのラオのように多くのタイは海域世界への道をもたなかった人びとである [Dodd 1923: V;309] (4)。

一方、タイ国側ではどうであったろうか。1930年刊行の商務通信省英文報告書は、東北タイのラオについて「自称はタイ、ラオはシャムによる他称」と記述する [MCC 1930: 97]。ダムロンも、ラオという呼称はバンコク首都住民の誤った見方によるものであると記している [Damrong 1974: 304-306]。この種の説明は、東南アジア大陸部の民族便覧に「ラオという名称は疑いもなくタイ北部、東北部に住むタイ語の話し手をさすものとしてシャム人が与えた」としてそのまま踏襲されている [Lebar et al. 1964: 188]。

タイの知識人チット・プーミサックはこういう見解である。タイ系諸族が「カー（下僕）」と総称し蔑んだ先住民（モン＝クメール系諸語族）にたいする勝利者としてラーンサーン王国を建てたころ、彼らは自らを「タイ」と呼んでいた。ラオという名称は当時では、集権者、偉大なる権勢者などの社会的地位を示す人称代名詞に近い語として使用されたが、その後、同国を属国として統治しはじめたタイ（シャム）側領主は、自他を区別するために、彼らをタイとせず今日残る軽蔑の意味をこめてラオとよぶようになった [Chit 1976: 384-88]。この議論にしたがえば、現在のタイ国を築くに至った為政者が、タイという呼称を独占しようとしたわけである。チットはタイという名称を優位者が手にする「称号」的意味をもつものとして捉える (5)。タイでない者はカー（ないしピー）である。その両者の間にタイより格下げされた通称としてのラオが位置づけられた。さらにチットは、ラオが語り継いできた神話伝承（タオ・フン）を引きつつ、ラオ人には古来より高い社会的地位にある人を意味する「ラオ」を誇りとする感情が存在していたので、そのような状況下におかれてもタイに固執せず、タイを棄ててラオを名乗り始めたとする。だが、為政者レベルでの動きとは別に、一般の人びとがいつ頃からどのようにしてラオを自称し始めたのかについては明らかにしていない [Chit 1976: 389-90]。

ビルマ人はタイと自称する隣人をシャンと呼び慣わして今日に至っている。16世紀にポルトガル人が記録したという「ラオ」は、当の人びとが名乗っていた名称というよりも、すでにそう呼んでいた（おそらく）チャオプラヤー川流域のタイ、つまりシャムとも呼ばれる人びとが与えた可能性は大いにある。たとえ同一の言語集団であっても、相互を差異化する集合的な呼称は、自己を対他的に規定する過程で生じ、社会的勢力をもつ者がそれを広める。外部者はそれが通用しているという経験的事実に基づいて、社会的勢力をめぐる複数の集団相互関係の当地での結果を、汎用性が高いという意味での「正確」な名称として記録するからである。

他方で、為政者ではないラオスや東北タイのラオ人は、今世紀に入ってから相互にタイを自称していたらしい事実がある。たとえば、東北タイ出身の地方史家トゥームが回想的に記す文章からもみてとれる。トゥームはラオという通称が自己とその仲間にたいして向けられていることを認めながらいう。「タイ族はラオであり、ラオ族はタイである。区別はできない。タイはラオの系譜をひいているし、ラオも自らをタイと呼ぶ。ルーイ県の人びと（同書第一巻では同県の創設者を「ルアンパバーンのタイ人 chao thai Luang Phrabang」と比定する [Toem 1970a: 333]）は、ウボンやローイエット、マハーサラカム、コーンケンから人びとがやってくるのをみると、タイ・タイ（該当個所の「注記」では「南側からのタイではなく、低地のタイ人」としている [cf. 林 1985]）と呼ぶ。逆に、ルーイ、ロムサック、ペッチャブーンの人びとがローイエットやコーンケン方面に行くとなると、当地の人びとは彼らを「タイ・ルーイ」「タイ・ロム（サック）」と呼ぶ。また、東北地方でも「ヴィエンチャンからの<ラオ人>がきたら『タイ・ヴィエンがやってきたよ』といていた」 [Toem 1970b: 454]。

さらに使用言語についても、ラオ人自らが「タイ語」と呼んでいたらしいことをも含めると [cf. Briggs 1949]、一般住民の間でラオという名乗りの作法が広く定着するのは、フランス植民地国家ラオスの成立、つまり制度的にラオ国籍が確立してさらに後のことになるのだろうか。民族呼称はそれが使われる文脈に依存して顕れる。それを他の言語集団が指標とし始めてからなのか。トゥームが記すような呼称の背景には、国家以前のそれぞれの地域拠点の間で合意、通用する在地的な民族内関係がみえてくる。同時に、こうした関係のなかにすでに国籍を背景としたタイ呼称の浸透をみるべきだという推測もできる。政体を異にする国家間関係を前提とした民族呼称のあり方は、記述者の社会経験の一部をもつくっている。トゥームとは異なる角度で、東北タイ生まれの別の知識人は次のように記している。

東北タイ人は「ずっと以前から」自らをタイ人とみなしてきた。ラオス側のラオとの相違と
いえば、フランスに植民地化されていないこと、中部タイの文化を受容してきたことである。

・・・双方のラオには往来がある。現在のラオスの政府高官で東北タイ出身者は少なくない。だが、東北人とラオ人がいかに近い関係にあり文化的にも似通っているとはいえ、東北人がいったん（現在の）ラオスの方へ渡れば、自らをタイであるという。ラオス側でも東北人を（ラオではなく）タイ人であるとみなすことになる。親戚同士でも同様である。政治的に両者は区別させられているのである。・・・かつて東北人は、中部タイ人にさしたる近親感や理解を示さなかった。中部タイ人と接触するときに東北人は自らをラオとよんだ。首都圏のタイ人も、同じタイ人でありながら区別して東北人のことをラオとよんでいた [Ko 1990:165-167]。

もともとメコン川流域に暮らしを営んできた同じ「タイ」人は、今日、相互に国籍を違える外国人どうしである。ラオとタイ（その旧名シャム）も、権力をもって相互に差異化しようとする為政者の自他関係において生じた。そこでは、政治的競合による同一言語集団内で勢力競合の関係であった。その意味では、国家こそ生活者を集合的に差異化する制度的単位である。しかし国家は生活者の現実を構成する強力な幻想のひとつではあっても、ある地域や民族から個人レベルにいたる多様な現実のすべてをからめ取る原理ではない。問題は、付与されたその名称を受容もしくは拒否する人びとが、いつごろからいかなる経緯でどのようにその名称や他の名称のなかに自己をはめこみ、利用しあるいは捨てるのかという点にある。国境が分断されて進行した個々の国家編制過程において、いにしえのタイ、かつてのラオは現在もそれぞれのアイデンティティを累積的に構築ないし呈示する過程のただ中におかれている。それは決して単線的軌道を描くものではない。

タイ国のラオ人居住区としての東北地方の特異な地域アイデンティティの生成過程については、多くの先行研究がある [Keyes 1966; 1967, Breazeale 1975, Cohen 1991, Brown 1994]。それらを踏まえ、ラオが国家間関係においてタイから差異化され、現実のものとして生まれて行く過程について以下に整理しておきたい。

今日のタイとラオス領内に仏教王権が成立してしばらく、中国人、西欧人からシャムよばれていたタイとラオは王国として対等な関係にあった。両者は16世紀半ばに友好の頂点を示している。時のアユタヤ王チャクラパット（1548-69）とラオ側のラーンサーン王セーターティラートは、今日のルーイ県ダンサーイ郡にタート・シーズンハックと呼ばれる仏塔を造成した。両国友愛の塔という意味だが、その背景には当時勢力を増してきたビルマに対して共闘を誓いあう意味をもっていた。

この王国間の対等・友好関係が崩れるのは、1610年のラーンサーン王国によるアユタヤへの攻撃を嚆矢とするといわれる(6)。しかし、16世紀に最盛期を迎えたラーンサーン王国

は、重なる内紛によって1713年までに三国に分裂してしまう。1707年にヴィエンチャン王国とルアンパバーン王国、ついで1713年にヴィエンチャンからチャンパサック王国が生まれた。こうした割拠時代に入って、18世紀後半にはヴィエンチャン王の支配から脱して中部タイ勢力と結ぶ官吏や開拓民が東北地方へ移住し始めている。その後、対ビルマをうちだしつつも、トンブリー遷都にあたってラオスとカンボジアの水陸両面侵攻を実行したタークシン(1767-82)のラオ諸国への攻撃は、メコン川を挟む兩岸の勢力関係を大きく変えてしまう。

チャンパサック建国もその流れにあるのだが、タークシンの攻撃は、ラオ側からメコン右岸への人びとの移動を強く促すものとなった。タイ語資料によると、ヴィエンチャン国では後のアヌ・ウォン王の父シーブンサーンの時代に国王と宰相との対立があり、1767年に宰相兄弟のプラウォーとプラター派数万人がノーンプアランプー(現在のウドンタニ県)に移住する(この前後の経緯は[Bamphen n.d.: 2-15]がもっとも詳細)。移住者はヴィエンチャンからの追撃を避けるため、ビルマに支援を依頼するが、ビルマはヴィエンチャンと手を組みプラターを討つ。残された一門はチー川を南下、現ヤソートーンのシンターに一時滞在してメコン川対岸のチャンパサックに庇護を乞う(1770年頃)。1773年にはさらにムーン川下流に後退、ドンモットデーに居住域をつくる。これが今日のウボン県の前身である。彼らは1774年コラートのシャム官僚を通じて庇護を求めた。シーブンサーンの一派はさらに追ってプラウォーも処刑する。残党はコラートを介してタークシンの庇護を求めたが、タークシンは後のラーマ1世にこれを任せ、1778年にチャンパサックとヴィエンチャンを征伐する。ウボンのラオ王族を「支援する」かたちで対岸の諸国を攻略したというわけである[Toem 1970a; KSLP 1989: 30-31]。

上の叙述からでは、ラオにはその国家政体への帰属をめぐり早くから自らシャムへの帰属を進んで求めた者と、そうではないグループが存在することになる。ラオ側資料は未検討なので、タークシンの「ラオ征伐」の名目がどこまで史実であるかは判断しかねるが、いずれにせよ、その結果タイ側は1778年にヴィエンチャンとルアンパバーンからそれぞれ守護仏をもちかえり、その内の一体パケーオ(エメラルド仏)を納めるワット・プラケーオ(現在のタイ観光名所エメラルド寺院)を建立(7)、翌1779年にはラオの各王国を朝貢国とした。以来、ラオ諸国の住人は王も庶民もタイ側の隷属者となる。

1782年に始まるラーマ1世時代以降、ヴィエンチャン王国の王子らはバンコク王宮内の人質として育ちシャム人としての教養を学んでいる。バンコク文化の移植もラオ自身の手でなされ、軍事力のみならず文化面においてもシャムの優位性が圧倒した。今日にいたるような中

部タイがまなざす「従属者」ラオはこの時期に確立されている。地方では、前述のウボンが中部タイに協力的で1792年にムアンに昇格した。東北タイの現在に至るラオの布置は、この時期に端緒をもっている。ウボンはその拠点となった。ただし、彼らはあくまでもバンコク勢力圏に内属する「異人」であった。1805年に編纂されたというタイ側の『三印法典』には、ラオはビルマ、モー、クメール、ケーラと並んで、タイ（族）とは明瞭に区別される異民族、異国人として記載されている [Ishii et al. 1990 vol. 4: 2810-2811]。

そのことは、従属者側の頂点にたつものにも対象化されていた。1824年から入墨制度を王国内、属国領に採用し壮丁徴収を本格化させたラーマ3世（1824-51）にたいし、アヌ・ウォン王の乱（1826-28）が起こる。アヌ・ウォン王はバンコクで育ち、青年時代シャムの軍司令の一人としてビルマのシャン州の戦闘でも活躍し模範的な隷属王であった。入墨された者はシャム公民となってラオではなくなる。そのシャム拡大主義への抵抗は、しかし失敗する（8）。アヌ・ウォン王は晒し者同然の溺死刑をうけた。この事件は、現在もアヌ・ウォンを英雄視するラオス側のラオ人知識人の間で歴史的「屈辱」として語り継がれるように、タイとラオの国家間関係において、メコン川左岸の住民における「ラオ」意識を強化するきっかけとなった。

それを反映するかのように、タイ仏教を刷新したラーマ4世（モンクット）王は1865年に首都バンコクからモラムなど「ラオ芸能」の上演を禁じる布告を出している。ラオの芸能がタイの地に根付くことは望ましいことではない、ラオはタイの隷属者であってもタイはラオに隷属したことはないとし、当時タイで大流行していたラオのケーを吹くのを1-2年停止せよ、違反者は処罰するというものである。拒否されたのは芸能ばかりではない。掠奪された守護仏像の一体パバーン仏も、タイ国内にあっては早魃の元凶となると忌み嫌われ返還された。

ラタナコーシン王朝初期（ラーマ1-4世）の為政者や歴史家は、東北地方のチー、ムーン川流域やメコン川沿いの人々をチャオプラヤー川流域の住人「タイ」と明瞭に区別して「ラオ」と記載している [Thawisin 1988]。タイとラオがその呼称を民族指標として袂を分かつものとして捉えさせる制度的布置は、続くラーマ5世時代に入る以前に「われら＝彼ら」図式として為政者レベルで醸成されていった経緯をみることができる。さらに、「タイ」人による「ラオ」人蔑視の背後で、ラオス領内でのラオ人意識の昂揚とそれに伴う東北タイ移住者への葛藤も顕在化する。筆者はランサーン王国解体の時期からラーマ4世の時期までに、今日複雑にもつれる「ラオ」の在り方をみている。冒頭で紹介した役人の語り（ステートメント）には、歴史的な国家間関係から生まれてきたラオ・アイデンティティの両義的意味を十分に解しつつ、慎重にふるいわけようとするラオス側のまなざしが示されている。

3 イサーン

迫りくる植民地勢力との関係のなかで、前世紀末から地方行政改革を進めたラーマ5世は、東北地方に住むラオ人の世界をタイの国民と土地として宣言せざるを得ない状況に追い込まれる。1892年以降の地方行政改革は、制度的に東北に住むラオをタイにする契機となる。中央政府が、東北地方に以前からあったラオを冠する地名を変更したり、民族名としてのラオの使用を法的に禁じたのは、植民地ラオス成立の1899年のことである。当時の改革を実質的に推進した内務大臣ダムロンは、ラオ人は存在せず同根のタイ人であると説いた [Damrong 1974: 304-306]。首都中央の人びとが抱く「異民族、異国人ラオ」は表向きには棚上げされ、国民同一性が求められた。ラーマ6世以降、バンコクを中心に国家アイデンティティや「タイ伝統文化」が再編・創造される過程で、東北タイを拠点とするラオはその影の部分を負うことになる。チャクリー改革以前からの「辺境の地」コラート高原にそうした舞台設定は容易であった。ラオ人はラオ語を話しモチ米を主食とする。ラオ人は納税者としてはタイとされつつ、構築されるタイ文化とは逆像をなす周縁人となってゆく。逆に、東北地方と中央政府との地理・政治的距離はその後一挙に縮小する。1920年代から30年代初頭にかけてバンコクからの鉄道が開通し、中央からの役人が常時派遣され、種々の法制措置が実効力をもち始める。東北地方のラオ人の社会史とは前世紀末以来、バンコク中央政府による一地方への編成過程をそのまま意味するものとなった。特に農村部はタイの法制、教育、宗教そして経済の変化を直接的に映す場となった。1920年代に初等学校で教師が教えた歌を、今も覚えている東北タイの古老は多い。その内容は「東北の地はタイのもの、われらイサーン、タイ国民として一致団結」というものである。さらに、第二次世界大戦中のピブーンの政策においても、ラオを名乗らないことはもちろん、唄の名称からもラオをはずすことが布告として強制されている [Ko 1990: 167-69]。中央当局は、ラオにたいする為政者側のパースペクティブを保持しつつ、中央との関係においてはタイ国の一地方化を繰り返し進め、民族アイデンティティとしてのラオ色を当地において脱色させようとしてきたといえる。

だが、1958年に在タイ外国人が著した『タイの人びと』でも、イサーンが東北地方以外の意味では記されていないように [Seidenfaden 1958]、それらが今日のような地域アイデンティティへと膨らみ始めるのは、中央政府の政策を直接的に反映し東北地方農村全体が世界の市場経済機構に突如投げ込まれた60年代以降のことである (cf. Keyes 1967: 12:39)。第二次世界大戦中にも東北タイはウマや綿の供給地であったが、大規模な換金作物栽培という点では60年代に本格化するケナフ、70年代のキャッサバがその契機を作った。また、1962

年にサリット政権が地方開発政策の拠点としてコーンケン県を拠点としたことで、東北地方は「悪漢」（共産主義者）と、米国の反共政策に歩調を合わせるバンコク政府が対峙する緊張の場と化した。こうした開発政策にいたる経緯はイサーンを経済・政治のより広い文脈に位置づけ、人びとの生活世界を認識させる一表象となった。さらに、ラオスを含む近隣諸国が相次いで社会主義国化するに及んでは、ラオス側の住人は「肝を喰う」共産主義者として喧伝され、東北タイのラオとの分離は急速に進んだ。そして、80年代初頭に東北タイに隠る最後の共産主義者の投降をもってこの地方はタイの開発優先地域として中央と一層直結してゆく。主食のモチ米を多く植えていた人びとも、今日ではその農地の7割から8割の田圃にウルチ米を植えることを辞さない。一義的にはそれは「市場米」である。それを売って、価格の安いモチ米を買うほうが効率がよいのである。

他方、ラオス側のラオ人は激動の時代を経験した。植民地化、そこから脱却するための社会主義化（1975～）、そして内戦、現在の対外経済開放政策（1986～）への道である。とりわけ、1945年以降の「30年戦争」とよばれる時期を経た社会主義への道のりは、タイ側のラオ人からは見えにくいものであった。米軍による猛烈な秘密爆撃の傷跡は現在もいたるところにみられる。その爆撃機は東北タイのラオ人が住むウボンやウドンの米軍駐留基地から飛来した。ラオス側での聞き取った個人史は、ラオもその他の民族もこぞって攻撃目標とさせる囹圄をつくり、日が暮れてから野良で耕作し森のなかで結婚式をあげたという、物理的暴力から逃れるくらしぶりを再現する。外部からの脅威は、ラオも非ラオもなく生存をかけた協力的行動を促してきた。それは教条としての社会主義より、相互扶助を縦糸とした、多数民族横並びの同胞主義の実践としてのラオ式社会主義に連なっている。

冒頭の「イサーンはラオではない」という表明には、ともに国家を異にするという尺度を一方で共有しつつも、異なるメッセージを運んでいる。モン＝クメール系の諸民族や山住みの民とともに国造りをしているラオスのラオ人は、彼ら周辺民族に対してきわめて明確な政治的・文化的求心力を創りだしている〔林 1994;1996、Hayashi 1995〕。仏教をはじめとする大伝統を担い、政治的ヘゲモニーを掌握するラオ人エリートにすれば、イサーンとはかつての民族の誇りや魂を売り渡した「非民族」としてのラオという含意がある。ただし、ラオスのラオ農民にこうした見方は少ない。それ以前にイサーンについて無関心である。爆弾を降らせた内戦から社会主義体制へ移行する30年間の経験は、国境をこえたキョウダイにたいする同胞意識や関心を培う基盤を忘却させている。

それとは対照的に、1984年に起こった国境（サイニャブリー・ウタラディット間）三村

問題は、タイ国側の一知識人のラオへの変わらぬまなざしを鮮やかに示す事件であった。タイ国の元首相で文筆家のククリット・プラモートはこの問題に関連して1988年2月23日付サイアムラット紙上で、ラオは自ら主人になったことがない、劣等感にさいなまれ続ける依存民、二百年たった今、再びヴィエンチャンを焼き払うべしと発言している[Wijeyewardene 1990]。こうした見方は、タイ伝統主義者にみえるククリットが、その近代思想の面において英国の教育を通して植民地主義的教養を備えた人間であることをこそ示すが、その奥底にはケーン（笙）をふくなど百十数年前に布告をだしたラーマ4世王と寸分違わぬものがみえる。為政者、知識人のまなざしのもとでは、小国のラオ人は永遠の隷属者とされ続ける。そして、それはそのまま同国のラオの地、イサーンへのまなざしをも構成する通奏低音をなしてきた。

民族（son phao）という個々の差異を全民族（banda phao）たる「民」（pasason）に解消して実現困難な同胞化を企てるラオスでこそ、民族の取り扱いが政治的に意識化されている(9)。当局は「主要民族」を言外の前提とする「山地民」「少数民族」という語法ないし用語も慎重に避ける。正反対に、タイではそれらを公然のものとしている。東北のみならず、南部のイスラム社会、北部のチャオカオであれ、民族やマイノリティの問題を、地方や地域性の問題として扱う傾向がある。逆にいえば、その地域性のイメージを喧伝しつつ中央当局からのまなざしの力学をほとんど包み隠すようにして、啓蒙的な装いを得た開発政策による「国民統合」を推進してきたといえるだろう。

実際に、タイ全国ないし政府当局から、あるいは東北人でないタイ国人がイサーンを語る場合、劣悪な環境、貧困とラオという含意がある。中部タイ人を主とする人びとが乾燥地のコラート高原とそこに住む人びとにたいして与えた言辞を順に並べれば、前世紀から今世紀にかけては異民族の巢窟、愚者の居住区とされ、第二次世界大戦以降は出稼者の温床、人心をかどわかす共産主義者の隠れ里、啓蒙・開発されるべき地域、といったものがあげられる。こうした見方は、「正史」「正論」を編纂するバンコクの為政者・知識人を通じて増産されてきた。自然や市場経済に翻弄されるばかりではなく、当事者性をまったく欠く外部者のまなざしによってイサーンは翻弄されそのイメージを再生産する。外国人による調査研究もその埒外にはない。60年代には、首都の人力サムロー引きのほとんどが東北出身のラオ農民であることを検証した研究[Textor 1967]も、そうした国内での言説を補強するために援用される。80年代に入ってようやく実質的なものとなった開発の時代に、天水依存のひび割れた田圃を前になす術もないという風情で佇む東北農民の写真は、官民が好むステレオタイプのアイコンとなった。中部からも北部からも憐憫と蔑みの視線を浴びる場所である。描き手は結果的にバンコクを中心

とする国家の政治的、文化的統合のためにイサーンの周縁性を増幅させてきた。第二次世界大戦後、先史遺跡のある地域として栄えある一頁を加えたが、マスコミを通じて非東北人および多くの外国人に与えられる東北地方の周縁的イメージは、およそ払拭される気配はない。すなわち公的な制度領域からラオという名は消されようとするが、蔑称としてのラオの痕跡はイサーンに継承されている。

イサーンという語は、中央政府のまなざしのなかでは「異民族」と対象化されつつも、対内的、対外的表象としてラオにとってかわる「地方」呼称である。開発計画の実験場となることにより、海外と連動する市場経済の波を直接的に被り、急激な社会変化によってその基盤を大変貌させてきた場所である。市場経済の波は、地方経済格差という尺度も現実のものとしてきた。そうした過程をへて、若い世代を中心にイサーンというアイデンティティが広く受容されてきているように思われる。冒頭に示した「イサーンにラオはいない」という言い方には、一国内で首都中央と連続する「地方」性を強調するものである。彼らにとってのラオとは、たとえ同じような言語を話す人びとであったとしても、社会経済的に閉ざされた体制をもち、自分たちの生活水準より下位にある外国の名称と住民である。彼らに民族という言葉はほとんど意味をなさない。今日標準タイ語で教育を受ける東北出身の人びとには、ラオと呼ばれることをあからさまに拒否する態度さえみられるが、それは「社会主義国化した異国」以前のラオの記憶を共有しない世代の間では、タイ国の一地方とその住民としてのイサーンという異なる自己定位法が支配的になりつつあることを示している。

にも関わらず、ラオという名称も意識も、百年近く取られ続けてきた政策の前に東北タイから根こそぎ消え失せてしまいつつあるわけでは必ずしもない。ひとつには年代的なズレ、個人差をもちながらも持続している。自己の文化的なアイデンティティをなおラオに求める者には、80年代初頭に筆者を叱責した年輩者のような人びとのみならず、分断されたラオはいずれ再び統合されなければならないと主張する知識人さえ、今日なお少なからず存在する(10)。

さらに東北タイのラオ人社会が成立する生活空間そのものに目を移すと明らかになることだが、生活空間をその場において共につくってきた隣人関係、民族間関係においてラオというアイデンティフィケーションが、その担い手自身の自己認識とは別に存在していることである。ラオは東北タイ地方最大の言語集団であるが、同一のラオ人が均質な地域世界をつくりあげているわけではない。他の東南アジア大陸部の地域と同様、タイ語系の言語集団ではない非タイ人が居住する。すなわち、モン＝クメール系諸語族であるスウェイ（自称はクイないしオイ）、チャオ・ボン（ニャークル）、クメール、さらにプータイ、ソー、カルーン、ニョーといった

人びとである。これらの多くの民族のなかにあつて、ラオは同地域における元々の住人というより新参の集団である。さまざまな言語集団がコミュニケーションするとき、そこではラオ語が同地域でのランガ・フランカとして使用される。そうした状況は、国家や中央との直接的な関わりとは異なる脈絡のなかで構築されてきたものであり、為政者が歴史的に表象してきた「ラオ」とも異なった位相をみせている。

辞書的な意味でのイサーンは、タイのコラート高原上の東北地方を意味する。ラオ語を母語としない少数者たちも、東北地方に住む人間として自らをイサーンということがある。したがって、今日使用されるイサーンには、①地理的意味、②「東北地方の住人」、③同地方に住む言語集団としてのラオ、という三つの意味が含まれている。現在も東北タイのクメール人はラオ語の話し手をラオとよび、いわれる方もラオを自称する。すなわち、東北タイのラオは、他地方のタイ人や外人にたいしてはイサーンもしくはタイを名乗り、東北地方の非ラオ系の隣人にはタイでもイサーンでもないラオを名乗っている。東北タイとラオスのラオ人が互いに向かい合うとき、両者は社交辞令としてキョウダイだと肩をたたきあつて同胞意識を表明する。ただしこの場合、現在住み分かれた現在のラオ人のことをさしておらず、遠い過去の記憶のメタファーとしてのラオがもちだされている。社交辞令が通じない問題状況に出合うとき、あなたはタイだから、とラオスのラオ人は明快に自他を差異化する。さらに、イサーンであると名乗る彼ら自身もまた、中央の人間がイサーンに向ける視線と同じものを投げかける相手を隣人のなかにもってきた。同じ東北地方に住むスウェー人であり、ケーオ（ヴェトナム）人である。彼ら非ラオとの関係においては、中央当局を向いてイサーンを自称する者がラオとなる。したがって、イサーンという地方アイデンティティの受容は当事者にとってかなり戦略的な側面を与えているということである。

4 東北タイにおける民族間関係(11)

(1) 東北タイの先住民

16世紀半ばまで、東北タイのコラート高原はアンコール勢力下におかれていた(1557年、アン・チャン1世が2万の軍勢で東北タイを占拠)。元々ラオ人がこの地方にどれほどいたかは定かではない。アンコール壊滅後、政治的に無人化したといわれるこの地域にラオ人の王族貴族やその取り巻きがやってきたという伝承があったとしても、アヌ・ウォン王反乱後約半世紀間で急増した人口の比ではなかったであろう。タイ側資料では、18世紀末のコラート高原上の地方国(ムアン)は15であるが、前世紀末には百以上になっている[Amorawong 1963]。

これはヴィエンチャン王国の人口削減政策として、戦後処理のためにとられたメコン川右岸への強制移住が引金となったといわれている。実際に1885年に禁止されるまで実施されていた入植誘致政策によっても、移住はランサーンが解体、タイに敗北する前後に始まり、従属が決定的になってから急増した。そして、ラーマ5世が内政改革を実施するまで、東北タイはラオ人の居住域として認識され、ナコンラーチャーシーマーを經由して税を徴収されるローカル・チャネルを除き、中央政府から名目上の支配しか受けていなかった。つまり、一種の政治的自律空間をなしていたのであり、内実はそのまま貢納-属領政策をとられていたメコンの東岸のラオ人社会と連続していたとみることができる。

前述のごとく、ラオ人の東北タイのコラート高原への移住がランサーン王国の分裂解体とともにもっとも盛んになったのは18世紀初頭のことである。それは後には今世紀にまでいたるタイ国の地方行政の中央集権化と並行して促進された。その経緯もあって、17世紀以前にはコラート高原上にほとんど人がいなかったかのような印象を与える。しかし、最近タイ国の知識人によって進められている古文書研究は、ラオ人の東北タイへの移住の前後の歴史状況について新たな光をあてつつある。それらによるとラオ人の移住が盛んになる前に、すでに住んでいた住民は、ラオやタイがカーと呼ばれてきた、モン=クメール諸語族の人びとであったらしい。16世紀から17世紀にかけてのコラート高原は、ラデーないしカーが勢力をもっていたとする見方もある〔Suchit 1995:52-54〕。また、18世紀初頭、今日のヤソートン周辺では移住してきたラオの貴族と「ピー」との間に治安上の問題や葛藤があったことを記す文献があり、ある歴史家は精霊として描かれているのは先住民であると推察している〔Thirachai n.d. 3-4〕。

こうした古文書のなかにだけでなく、今日東北タイに住む高齢者の人びとの回想のなかにも彼等は現れる。モン=クメール系諸語を話す先住民たちは、ラオスと東北タイを往来していた。ラオスには「山腹ラオ Lao Thoeng」という政策上の民族範疇に括られた数多くの先住民族が住んでいる。30年戦争でのゲリラ戦に活躍した人びとである。1992年までの統計では全人口の25パーセントを占める。これにたいし、東北タイでは、彼らはタイ化したクイ、ニョー、ソー人らを残し、ほとんどが過去の歴史のなかに埋もれてしまっている。ラオの古老の語りのなかに生きているだけであるが、第二次世界大戦後しばらくの約40年前まで、彼らはラオスから東北タイに林立したラオ人集落の間をぬうようにしてやっていた。

ただしそれは住人ではなく、東北タイへの「帰還者」として登場している。それはチー川流域の集落よりも、ソクラーム川流域およびムーン川流域および（すなわちヴィエンチャンやチャンパサックの対岸地域）で顕著である。そのあたりの老人たちは、幼年時代にさまざまな

名称で記憶する「異人」と出会ったことを語ってきかせる。ソクラーム川流域のラオ、カルーン、プータイの古老たちの間では、カー・タオイ（Kha Taoi）、カー・ハーン（Kha Hang）がそれぞれの集落を訪れている。他方、ムーン川流域にあたるウボン、ヤソートン周辺のラオの集落では、カー・ラデー（Kha Rhade）、カー・ソン（Kha Song）カー・パイソン（Kha Pa isong）そしてカー・トンルアン（Kha Ton Luang）と呼ばれる人びとが古老たちの口にのぼる。ラオスからメコン川を越えてやってきた異質な言語集団にはことごとく「カー」という接頭語がつけられる。どの民族をさすわけでもない。

それぞれの回想には共通したものがある。それは彼らの身体的特徴であり訪問理由である。

サコンナコン県のカルーンの集落B村の古老の一人は次のようにいう。「14-5歳の頃（1920年代）、ラオスのほうからカー・タオイがやってきた。後頭部に長髪を束ね石弓と背負い籠をもった彼らは、ラオ語でこのわれわれの村をもととは自分たちタオイのものだったというんだ」。さらに、1902年生まれ of 長老も「自分が40代の後半のときにも同じカー・タオイが来ている。とにかく長身で色が黒くて、水浴びもしていなんでしょう、臭う連中さ。『骨を入れる』古い壺を探しに来ていたんだ」[T. Kut Bak, A. Kut Bak, C. Sakon Nakhon]。

他方、ウボンはクアンナイ郡KY村の81歳のラオ人インフォーマント（1993年時）は次のようにいっている。「10歳かそこらのときにみたきりだが、カー・ラデーとかカー・トンルアンが集団でこの村にやってきた。背中に長い籠をしょいこみ、ふんどしをしていた。彼らは分かれて村に入り、自分たちの祖先がもっていた古い壺を探しに来たという。コーム時代のものだといていた。また、大昔に自分たちはここに住んでいたともいった」[T. Klang Yai, A. Khuang Nai, C. Ubon]。

彼らの多くは訪問先で、先祖がラオスへ渡る前に埋めた「古い壺」を掘り起こしにきた、と告げている。ヤソートンのラオ人集落のNK村では、カー・パイソンが同じように壺を探しにやってきたがみつからなかったので、ラオス側からやってきた偽銀をタイの銀貨と交換しようとしたという話も伝わる。ウボンのクアンナイ郡のBK村にもカー・ラデー、カー・トンルアンとして記憶される同様の人びとが1920年代中頃に集団でやってきている。自分たちの先祖がもっていたものを探しにきた、といい、その集落がやはり昔の集落だったと述べた。現在でもラオスの山腹ラオの慣習としてみることができるよう、モン・クメール系諸族の社会では代々継承されてきた壺や銅鼓は、水牛とともに自己のステータスをしめす財産、婚資金である。陳列されてその所有者の富と名誉を顕示する。これを壊すことは甚大なる侮辱を与えるこ

とである(12)。イジコヴィッツは北ラオスのラメット人社会において、集落の安穩を祈願する水牛供儀の儀礼で使われた銅鼓や絹布が、儀礼終了後はその所持者（首長）だけが知る森のなかの地中に埋められていたことを記しているが[Izikowitz 1951: 300]、筆者の聞き取りでも、東北タイのシーサケートに住むスウェイ（自称はクイないしオイ）の集落では、つい先代まで壺に金や銀を入れて土中に埋める習慣があった。彼らは村を他所へ移す際、移動中に奪われることを懸念して壺を同時に運ぶことはしない。移動する前に壺を土中に埋め村（家屋）の移転を無事に終え移転先が安寧であることを確認した後に、旧村（家屋）へもどりそれを掘りおこして移す。埋蔵場所はその周囲の樹木の位置や地勢で判断された。古老たちが遭遇したさまざまな「カー」の訪問も、おそらくそのための帰還であったと思われる。

東北タイに「カー」たちがやってきた時期は、筆者が蒐集した聞き取り資料では1905年頃が最も古い。記憶をとどめるインフォーマントの年代の上限である。それ以前にも彼らの訪問はあったに違いない。また、第二次世界大戦以後に東北タイを訪れた「カー」たちは、壺を求めるだけではなく、ラオス側よりも良質と彼らが信じたタイ側の銀を求めにきたというものや、小規模な行商もするようになっている。ナコンパノムのプータイの集落には、ラオスのサーラワンから籐細工やカミン、ティップカーオ（米櫃）や薬草を売りに来たカー・タオイが記憶されている。季節を選ばずにやってきたという。しかし、1950年代半ばを境にしてどの集落でも「カー」の訪問がなくなっている。

東北タイのラオの人びと、とりわけ高齢女性たちは、カーが背負っていた美しい籠は、ラオの子供を入れるためのものだったという。彼らが祀る精霊に捧げるために、籠に入れた子供を（壺を埋めるのと同様）土中に埋めると金や銀がなる木生えてくるという信仰が彼らの宗教だったといまも信じている。そして、そうした話が人びとの間で語りつがれていた。母親に、「カーやタイがお前をさらいにくるよ」「肝を食べにくるよ」といって寝かしつけられた当時のラオの子供たちが、今日老境にある本稿のインフォーマントたちであった。その「異人」の記憶は、石弓もしくは槍を携えてふんどしをした長身の男たち、皮膚は黒く長髪、異様な体臭、それと対照をなすように美しく編み込まれた細長く背負い籠などの形象とともにある。そして、そうした集団のなかには、必ずラオ語を流暢に話す者が混じっていた。だが、彼らだけで話しているのを耳にすると、「まるで鶏がいないよう」なことば、だったといっている。

訪問者たちがそのままラオ人女性と結婚して集落に残ったという例はきわめて少ない。ほとんどが東北タイのラオ人集落を転々とした後、ラオスへもどったと伝えられている。婚入した例では、その末裔はラオとして認知されている。興味深いのは、訪問者であったカーの人びと

は、東北タイの人びとのことをタイ国側のラオ（ラオ・タイ）と認知しており、カーを前にした人びとがその記憶を話すときには、一様に自分たちのことをタイではなく（この文脈では、タイもカーも外部者である）、ラオとして自らを語ることである。

（２）隣人関係のなかのラオ

東北タイのラオ人は東北地方以外の人びとに対してはイサーンを名乗るが、東北地方の少数者たちとの関係においては、ラオと呼ばれラオを名乗る。また、ラオでない人びとはラオ人のことを「半農民、半商人」のような行動様式をもつ人びととして語る。時代を遡るほど、それははっきりする。ラオ人にすれば、よりよい暮らし向きの方途、地位向上を求めて、未耕地の探索や先住者との交渉を繰り返してきたのがこの半世紀の生きざまでであった。同時に、移動に移動を重ね、異民族の娘と結婚して土地を手にし、それを後からやってくるラオ人たちに高値をつけて転売・村外出を繰り返してきたやり方は、頭がよく商い上手という印象を非ラオ人に与えている。シーサケートに住むクメール人のある古老は、自己の利益のために先住者や異なる言語集団との交通交渉に長け、故郷をひとつとしない羨ましい人びとだ、とラオを評する。このラオ人像は、イジコヴィッツが約半世紀前に記述するラオス側のラオ人が実践する異民族間関係のありかたとかなり一致する [Izikowitz 1969:137]。

ナコンラーチャシーマーに居住する「少数民族」チャオ・ボン（chao bon, 言語集団名としてはニャークル）を調査したブリーチャーらによれば、彼らは嫌悪感をもってラオとタイを次のように観ているという。「（ラオは）どこかにバナナやサトウキビを求めて集まるモット・ンガーム（蟻の一種、*pheidologeton dwersus*）のようだ（蟻はどこかに甘いものをみつければ、そこへ群をなして集まりたかりすっかり食い尽くす）。われわれチャオボンはなんのおこぼれにもあずからない、蟻（ラオ）がすべて食べ尽くす」 [Pricha et al. n.d. 3]。この種の見解は、かなりの程度までコラート高原上の他の非ラオの少数者たちが共有している。彼らは一方では流暢なラオ語を使って、その見方を示している。同じ地域をともしにするその隣人たちのまなざしのなかで、ラオがどのように観られているのかをあげておこう。文体の如何を問わず、叙述はすべて聞き取りから得られた語り（ほとんどがラオ語）に基づいている。

a. スウェイ（クイ）のまなざしのなかの「ラオ」

NK村 [T. NK, A. Nam Kliang, C. Sisaket] は「村長」制度が導入される年（1892年）より前に開村された。現在はラオとの混住村になっている。仏教寺院がある。

【村長／男／1954生】ラオ人は2割ほどである。彼らは皆あとからやってきて住んでいる。スウェーの村人は彼ら同様水稲耕作をしている。陸稲作はイネの病気と甲虫の害（rok duwong）が重なったので25年前に破棄した。ラオと同じくモチ米を主食としてきたが、ウルチを多く植えるようになっている。ウルチ種を売ってモチ種を買う。仕事をする昼にはモチ種を食べ、夕食にウルチ種を食べる。以前、陸稲を植えていた地所には商品作物のキャッサバ、最近では市場価格がいいケナフを植える。畑の使い方は、一年目にスイカ、二年目にトウモロコシを交互に植える。1987年からユーカリ植林が始まった。1キロあたり70-80サタンで売れる。村長が初等科1年のころ、1960年代初めから、人びとはケナフを植え始めた。また、昔は森がたくさん残っていたが、1975年にスリンからキャッサバの種を持ち帰った人があり、森を開いて植え始めて一挙に広がった。

【古老／男／1924生】自分はずっとここに生まれ住んでいる。われわれの祖先は同郡内のSS村出身者である。この村のスウェーで新しく移り住んできた者はいない。ラオとクメールと一緒に住む同郡内のTP村へ移出した者はいる。昔は、ラオと一緒に住むスウェーの村などはなく、それぞれ別の村をつくって住んだ。この村に初めてやってきたラオ人は、かなり年輩の教師だった。4年間住んだが独身のままだった。自分はその最初の生徒である。12歳のときで寺院の講堂を使っていた。3年間（1937-39）で初等科1年から3年までを履修した。習ったのはタイ語と算術。このことはよく覚えている。最後の年、それまでの国名サヤームから今のタイになった（タイ国歌を口ずさむ）。

一般人としてのラオがいつごろこの村に往来しだしたのかは定かではないが、仏暦2514（西暦1971）年にラオの警察官がここに来た。それ以降、普通のラオが入村し始めたような気がする。彼らはたいてい単身でこなかった。先に結婚していて夫婦家族でやってくる。そしてわれわれから畑地（hai）を買い、耕作していた。そして、さらに後からやってくるラオ人にそれを売っていた。ラオのP親父は25年位前にここに来た。当時23歳くらいだったろうか。二人目の子どもができた直後だった。最初、P親父は1ライ当り400-500バーツでわれわれスウェーから土地を購入した。しかし、後に2-3家族のラオ人世帯がやってくると、ポーおやじは新参者（ラオ）に1ライあたり五千バーツ位で売る。大儲けしてた。そうやって土地を売り買いしていた。彼は（「土地転がし」をしつつ）今日までここにいる。

【村の守護霊儀礼の執行者 cham B／男／1925生】この村出身。母はこの村出身のスウェー、父はN村出身のラオ。父は出家し還俗して後にこの村で妻をめとった。9人（男6、女9）の子をもうけた。B氏は5番目。全員、スウェーの男女と結婚している。この村に残るのはB氏

ほか4人である。

当人という、昔はラオの家族もいたときいているが、すでに物心ついたときにはそれまで知っていたラオの家族はいなかった。残ったのは自分達の家族だけである。15歳のとき、この村から約26キロ離れたスウェイの村K（現在はラオばかり）の寺で見習僧となった。同寺の住職が自分が生まれたこのNK村出身者だったからである。そこで2年を過ごす。教法試験の勉強もした。還俗して帰村、すぐに結婚する（17歳）。妻はスウェイで14歳だった。ふたりの子ども（長男、長女）をもうけるが、上の子が3歳、下の子が1歳のときに離婚、子どもらは母方にひきとられた。（妻が子をひきとる慣行は一般的）二年後、再婚。現在の妻（スウェイ）をめとる。教法試験3級（naktham trai）と仏法原理（lakthamm）を勉強した。

自村の寺院に布薩堂ができたのは1969年のことである。チャムになったのは7年前で村人との合意のもとに選出された。前のチャムのとき、人や水牛が次々と病気になったり死ぬという災禍がおきた。それで前任のチャムは責任をとってやめたのである。自分はそれをひきうけることになった。・・・村の守護霊は、スウェイの間では i-pu と呼ぶ。のちに、i-pu, i-ta となった。チャムは、ブン（仏教儀礼）ごとにイプーを祀らなければならない。人びとが遠出するときにも、プーチャーする。陰暦3月3夜に、リアン・ヤーチョー liang ya cho という儀礼をする。朝9時ごろ。家屋（dung）毎にゆでた鶏1羽、米1碗、酒1瓶、ローソク・線香1対ずつ、花とともに準備し、その家屋の主が祠へでかける。それらの供物を祠の下へおく。チャムは上に上がって司式する。他の男女も上にあがることはできる。各自がゆでた鶏の喉を切って声帯（khang kai）をみて雨、安寧の程度を占う。声帯の先端が下を向いていたり、上を向いているようであればよくない。まっすぐ水平に90度で折れ曲がっていれば、最上（大吉）である。祠のもとでの共食はとくに定められていない。捧げた鶏や卵をもちかえって食べる者がおおい【次第はラオの守護霊儀礼とほとんど同じ】。

ラオでいう phi thaen phi fa 信仰がある。これを司式するのは mo lam phi fa である。女性（mae len thaen [SWEI: kheru thaen]）は、治療儀礼をラオ語でやる。モータムも多数いる。クメール、ラオ、スウェイのモータムがいる。以前にはいなかったようだが、村長が生まれてからは存在している。スウェイの人びとは彼らを総称してタム（tham/仏法）とよぶ。

このように、ラオとスウェイは同じ仏教と同じ習慣をもっているのでラオとの葛藤はほとんどなかった。

KW村 [T. KW, A. Kantharalak, C. Sisaket]

仏教寺院がある。現在の村長はラオ人で妻はスウェイ。綿づくりをしている。

【寺委員長／男／1935生】塩はラオから買っていた。唐辛子 the と綿 kapa とで交換した。交換相手はラオだけではなくクメールともしていた。自分たちは米や綿を交換財としていた。初 4-5 キロでナイフひとつが得られた。布を織ったとき、それも売った。スウェイの元村ふたつは現在はラオの村になっている。古い村ほど新参のラオが占拠し、スウェイが多い村は新しい。ラオはスウェイの妻をもらいに入村してきた。伝え聞いた話では、約 100 年ほど前になろうか。現在では、ラオ 100% の世帯が 50、スウェイでラオの妻を得るケースを多く含むスウェーラオパタン世帯（人数）が 30。村の人口は 1378、世帯数が 287 であるから、ラオはまだ少数派である。だから、ここはまだスウェイの村だ。ラオの男がスウェイの妻をめとる場合、婚礼はスウェイ式になる。スウェイの婚資金は高くつく（1992 年時点で平均 3 万バーツ [15 万円]）。妻方に居住する。もっとも最近では、ラオの女性もこちらでのトウモロコシの収穫を手伝いにきて日銭を稼ぐようになっている。彼女たちは、スウェイの男と結婚する。生まれた子供？それはラオ語を話すようになるからラオ人だろうよ。スウェイとラオの結婚は、最近では出稼ぎにでたバンコクなどで知り合うので、普通になった。

TD 村 [T. TD, A. Muang, C. Sisaket]

【古老／男／1918生】われわれの村はもともと鍛冶が盛んな村だった。斧やナイフ、堀棒につける刃などを作って、それを天秤棒で担いで売りに歩いた。ヤソートン、ウボン方面だけではなく、コーンケン、ローイエットにも売りに歩いた。一年に四度はこうした行商に出た。ラオの村だけではない。クメール、スウェイの村にも売りに行った。お得意さんはラオやクメールだったので、ふたつの言葉はしゃべれる。基本的にはラオ語で通じる。いつでも、売るもの以外に食事などを携帯してゆくことはない。それぞれの村には仏教寺院があつて、そこで食事がありつける。寝泊まりもそこです。第二次世界大戦前までは、「クラー」（後述）の行商が、われわれの村にもよくやってくる。彼らはわれわれと同じように、しかし大きめの天秤棒を担いで主に衣服や耳飾りのような装飾品を売っていた。ラオの人びとは、60 年代近くまでわれわれの村にコメを売りに来ていた。

b. クメールのまなざしのなかの「ラオ」

K 村 [T. KS, A. Kantharalak, C. Sisaket]

30 キロも南下すればカンボジア西北部へ抜ける。この村でラオ語が話せる女性は多くない。仏教寺院に止住する 89 歳の老僧も、カンボジアからでてきて 30 年以上になるが、ほとんどラオ語を解さない。クメール語の貝葉折本がある。説法はクメール語で行う。寺院にはこれま

でラオ人の僧侶が止住したことがない。村の老人はクメール語が読み書きできる。

【古老／元校長／男／1929生】（語気強く）・・・わたしらはクメールだ。ラオと違って金儲けのために、おいそれと自分たちの親たちから譲り受けた土地を棄ててまですることはしない。出稼ぎをするのはラオである。われわれの村からはサウジアラビアやシンガポールへ出るものはいない。・・・父親はクカン出身だった。独身でここへやってきてクメールの妻をめとった。わたらしらの祖先は皆クカンにいた。そして徐々に東へと移住してきた。砂糖椰子が茂るよい土地をみつけてできた村が元村のTである。人口が増えて食糧が少なくなったので、南側の沼のそばに7戸が分かれて集落をなした。これが現在のK村である。今から80-90年程前のことである。・・・元村のいくつかは『ラオに食われてしまった (Lao kin) 』。たいていは、まずラオの男性がクメールの妻をめとって婚入する。そして、彼を頼ってすでに世帯をよそでなしてきたラオ人夫婦や家族がどっと押し寄せてくる。最終的に、彼らが元々クメールであった村を占拠してしまう。R村がそうだ。彼らの何人かのクメール人は、まるで追われるようなかっこうで、近くに別の場所に新しい村を作って移り住んでいる。クメールの古い伝統や習慣を知りたかったら、古い村ではなく新しく開村されたところへ行くほうがよい。

第二次世界大戦の前には、クラーとラオ、ケーオ（ヴェトナム人）がよくこの村にやってきた。われわれが作った松明（kabon）を買いに来ていたのである。1960年代以降は、プータイの人びとがわれわれの織った布を買い求めに来るようになった。スウェイの人びとはここへ鋤や鍬、ナイフなどの鉄製品を売りに来た。スウェイはクメール語が分かった。われわれは、スウェイのことばはわからなかったが、ずっと昔から、わたしらクメールは買う多くのコメの品種をもっていたので、同じクメールはもちろん、ラオやスウェイの集落からそれを分けてほしいとやってきた。往時の東北地方（イサーン）にはたくさんの未耕地があった。実際に、誰でも行こうと思えばどこへでも好きな場所へ移り住むことができた。ラオは自分たちの農地を増やすために、それこそ頻繁にあちこちに動き回ったけれど、わたしらクメールはそれを好まなかった。余ったコメを売ることもしなかった。

D T村 [T. KS, A. Kantharalak, C. Sisaket]

古いクメール様式の布薩堂がある。ただし、人口はラオが半分近くになっている、

【長老僧／1922生】現在の村名は1989年に変更された。それまではサメック村といった。これはスウェイ語である。ただし現在スウェイは一人もいない。以前スウェイがいたらしいと村人は思ってきた。父親はこの村生まれ、母親は幼いときにカンボジアからの移住者と一緒にこの村へやってきた。母はカンボジア人国籍をもっていた。父としりあって生まれたわたしら

はしかし、タイ人国籍である。

30歳のとき（1952年頃）、こちらの土は悪いといって何人かの村人がカンボジアへ帰還した。しかし出ていった彼らを除いて、東北地方には他の支村をだしていない。ここのクメールは皆農民で、こちらの土が砂っぽいということは熟知している。だから、多くの陸稲品種を植えてきた。ところが40歳のころになると、村の周囲にあった森林はほとんどなくなった。それらは水田に変えられてしまったからである。陸稲種は植えられなくなって、以前の地所はケナフ畑になってしまっている。

かつて、ラオの男性はクメール女性とは結婚しなかったものだ。あちらこちらに未耕地があったから、強いてクメールの村に近づく必要もなかったんだろう。実際に、ラオはどこへでも気の赴くままに好きなどころへ行って〔土地を開いて〕いた。現在では、クメールもスウェーの村も見境なく婿入り、さらにはあの手この手で外国へも行っている。自分は、ラオはあちこちへどんどんと移動するのが好きなんだとしかみえない。クメールは今でも昔でもそうではない。出稼ぎといってもせいぜいバンコクどまりである。われわれは元々ひとつの土地と家族に強い愛着を抱いている。結果的にラオがあちこちに自分の拠点をもつことになって、クメールは同じところかその辺りに住んでいる。ラオは自分たちの輪と系譜を広げる能力をもっている。

c. カルーンのまなざしのなかの「ラオ」

B村 [T. KB, A. Kut Bak, C. Sakon Nakhon]

【古老／男／1920S?】カルーンはつくるだけの人びと。ラオとプータイはそれを転売してもうける頭のいい人びとだ。そしてずるい。ラオ、プータイ（クチナラナイ、カラシン方面）の人びとはしょっちゅう、引っ越しする。移住するのが上手な人びとだ。そして自分らのなわばりを広げるのがうまい。カルーンの昔の老人はよくいったものだ。「（彼らの家族は）三日で家屋を引っ越し、村は三ヶ月でまるごと移動、いかにせん」（あちらこちらへ動くのはよくない。頻繁なる移動は拠点をもてずよくない）。この村では1987年時点でも、全村人口のわずか3%がバンコクへ出稼ぎにでている程度である。

【村の守護霊儀礼を祀るチャムの妻／女／1930S?】夢のなかにわたしたちの村の守護霊がでてくる。守護霊は、新しい居場所がほしいと繰り返すいう。ある日、このように指示された。最寄りのラオの集落へでかけて、守護霊祭祀に詳しい人と相談して、こちらのカルーンの村の方へきてもらいなさい、そして、村の集会所の前でモーシェンコーン（憑霊占い）をしてもらって新しい場所を選定せよ、といった。

d. ニョーのまなざしのなかの「ラオ」

HS村 [T. HS, A. Loeng Nokta, C. Yasothon]

【現村長／男／1936生】ラオがこのニョーの村にやってきたのは、約50年ほど前の第二次世界大戦中のことだった。ラオの女性がニョーの男性と結婚して住んだ。その後、ラオの数がどんどん増えてラオの村になってしまった。つまり、別の村からラオの男性がやってきてニョーの妻をめとる。しばらくして、自分のものとした土地を後からやってきたラオ人に売りつけて、自分たちはさらに別の地所へでていってしまうのである。ラオは、われわれの土地をラオに売ってこの村を通り過ぎて行くような人びとである。ニョーは、ラオよりもプータイと親しい関係にある。われわれはキョウダイであり、互いに信頼しあえる仲間どうしだ。

e. ヨーイのまなざしのなかの「ラオ」

AK村 [T. AK, A. Aakat Amnuai, C. Sakon Nakhon]

【古老／男／1919生】われわれはラオと違って、水田を増やすことにさほど関心は抱いてこなかった。むしろ、タバコや野菜のような換金作物を植えることに熱心だった。かつて、サコンナコンのプータイの人びとはことごとくナーイホーイ（地方移動商人）だった。彼らが農民になったのはその後のことである。彼らは、多くのコメ品種の知識をもっていた。1932年か33年ころに、ひとりのプータイが村にやってきて、われわれの村に浮稲（ウルチ種）をもちこんだ。ナーイホーイとは、あちこちを駆け回りながらそういう知識をも得て、あちこちの場所でやりとりする人びとなのだと思ったものさ。ラオもナーイホーイをするようになった人びとだ。今では、われわれニョーは金もうけするために、バンコクや南部のソクラーにだっでかけている。ある若者はサウジアラビア、シンガポール、日本へも行ってるよ。

東北タイに住む非ラオ人たちは、多くの場合、ラオのことをノマディックな移住、何らかの経済的利益を生みだすような行動ができる人びとないしそうした知識を活用して自己の社会的勢力を伸張させる人びととしてみている。言語学者のようにラオ語の話し手とは決してみていない。言語を問題にするのは、ラオの方である。少数者の非ラオ人にとって、言語の問題はほとんど重要でない。クメール人集落での印象はやや異なるが、彼らはことごとく多言語使用者である。複数言語の世界に生きることがごく自然な環境となっている。ラオは、カーやスウェイなど「少数者」をしばしば蔑視の対象とするが、その言語能力には一目おいている。一言語に習熟することと、その言語の担い手の文化に同化することとは、ここでは無関係なことである。

スウェイやヨーイはそうしたことを経験的に熟知している。いずれにせよ、彼らがラオをアイデンティファイする時には、その行動様式にこそ、自他との差異化規準をみいだしているのである。一言でいってしまえば、やや抽象的にすぎるが、境界を越える知識とその実践、といえるように思われる。

さて、まなざされるラオの声もきいてみよう。

KY村 [T. KY, A. Khuang Nai, C. Ubon Ratchathani]

【B氏／男子／1909生】父親はラオ人の農民である。コラートの北部のほうへよく行商にでていた。その途中で多くの村をみる機会を得ていた。どこの村がいい田圃をもっているのかよく知っていた。自分の牛車をもっていて、乾季になると友人とともに、牛車を7-10台連ねてでかけていった。父はその商隊の首長だった。もちろん、行き先は前もって相談している。時には、メコン川岸のブンカムまで行っていた。でかける先々の集落でさまざまな物を買う。籐や森林産品、松明などである。それを、帰路売りつくしてくるのである。行程日数は15夜から20夜ほどだった。そんなことをしているうちに、あちこちの状況についての知識を蓄えたようだ。かつて東北地方には多くの余剰地があった。（ラオの）村人たちはこぞって村の外にある場所をみて、森林を水田に変えようと望んでいたし、そう努めていた。実際に、当時の地方役人も、そうするよう奨励していたものだった。

ただし、KY村の人びとは南部への行商は決してしなかったといわれる。とりわけ、クメールやスウェイが多いスリンあたりには、盗賊が多いと信じられていたことによる。彼らは行商のときにはかならず北上してローイエットを中継地として移動することを好んだ。もちろん、盗賊以上におそれられたのは、「森の熱」とよばれるマラリアであった。

いずれにせよ、ラオがことごとくこうした行動をとったわけではない。商隊の行動には何らかの元でがいった。牛車や河川を使う場合の舟を購入することも、余剰米がなければまならないことであった。

（3）行商・コメ品種にみる民族間関係

東北タイのラオがやや蔑みのまなざしをもって語ってきた多くの「非ラオ」人の中で、例外的ともいえる人びとがいる。それが、ビルマから行商しながらやってきたタイ・ヤイやビルマ系の人びとである。ラオのみならず、東北タイの年輩者にはクラーないしトンスーと呼ばれて記憶されている。古老にクラーのことを問えば「寺院で寝泊まりしながら布を売り歩いていた行商人」という決まり文句が帰る。第二次世界大戦が勃発するまで、主にムーン川流域の集落

をぬうようにして布、衣服、銅鑼、銀器、宝石などを売り歩いた、当時ビルマ国籍をもつ外国人であった。クラーは特定の言語集団というより「異国人（とつくにびと）」全般を意味するビルマ語カラー kala に由来すると思われる(13)。

人びとの記憶のなかのクラーとは、一様に背が高く、頭に白いターバンを巻き、耳に飾り物をつけていた男である。牛車を使わず、ラオ人が作るより大きい籠を対にした天秤棒を使っての行商人である。またラオの古老男性は例外なく、強力な守護力を秘めた宗教的知識「ウィサー」〔林 印刷中〕を持っていた人びととして語る。彼らクラーは、国境も、どの集落の境界も頓着せずに越えて行き、盗賊や熱病の危害も畏れずに遠くへ歩んで行ける男のなかの男、として語られる。当時のクラーがラオの妻をめとってそのまま暮らし、末裔が残る集落がある。ウボン県クアンナイ郡のNC、NY村、ヤソートン県マーチャナチャイ郡のBK村である。それらの集落の年老いた女性たちが語るクラーは、「裕福で善人」「銀や金、すべてをもつ人」「勤勉」「ラオの妻と家族を捨てなかった人」「敬虔なる仏教徒」「ラオの娘なら皆結婚したがった」等々というものである。結婚したクラーは、妻方の両親の農地を耕した。何人かのクラーは土が固いために、田植えのときに指をよく傷つけた。農閑期がくると、やはり集団を組んで行商にでた。婚入後は、余剰米やサトウキビの煮汁を固形にしたもの、その他のものを天秤棒に担いで売りにでた。

a. 行商

NY村 [T. KY, A. Khuang Nai, C. Ubon Ratchathani]

【B氏／男子／1913生】12歳のとき（1925年）に村にやってきた12人のクラーの名前をすらすらと思い出す。そのうち8人が行商人、4人は僧侶であった。

「彼らはラオの妻をめとった。僧侶のうち一人はこちらへ来てから還俗しラオの娘と結婚した。他の三人は生涯僧侶のままでこの村で亡くなった。

初めて彼らがこの村にやってきたとき、天秤棒の荷担ぎを手伝うチェンマイ、ランパーン地方の出身者（ラオの古老は「ナーン」と総称する）が同行していた。クラーに雇われたルーク・ノーン（子分、助手）で、1年間で12パーツの賃金を受け取っていた。その時は、タイ北部、東北部でみられる柄をつけた綿布、絹布を売っていた。いずれも染め上げたものである。1ワ－あたり25サタンから50サタンであった。行商のクラーは金をバンド状にした腰布にいれ、そのまま腹にまきつけていた。金だけではなく、精米したコメもそこに入れていた。天秤棒で担ぐと重いからである。東北タイの人は、一目見てクラーとわかれば、彼らを襲撃する

ことがあった。でも、クラーはすごい呪符 (khatha) をもっていて、殺されたりすることはなかったらしい。

・・・当時、ラオの村人はふたつの仕事をしていた。水稻耕作と行商である。当時の商売は利益を得るのに苦労した。とってきた魚や豚、牛の肉をうる。〔村のなかや周辺だけでは〕1日よくても4-5サタンの金を得るのがせいぜいである。オスの成牛一頭が1パーツ50サタンした時代である。アヒルやニワトリも売った。村ではウルチもモチもコメは等価 (saen la bat/120kg当り1パーツ) で交換された。ある者は鍛冶や彫金もやった。水田耕作しながら。だが、しれたものだった。普通は交換になってしまい、利益はほとんどなかった。欲しかったのはお金だ。ちょうど20歳 (1993年) になってから〔太陽暦の〕12月から4月の農閑期に〔ウボン市内の華人から委託された〕一対10サタンの耳飾りや首飾りを、3-5人の友人たちと東北の村々で売り始めた。他のもの〔蚊帳や化学染料など〕も毎年そうやって売り歩き、年にして12パーツから30パーツの利益がでるようになった。

村のクラーたちも、同じように行商にでた。われわれとは別行動である。同じルートもとらない。やり方も異なっていた。われわれは用意したものが売れてなくなるとすぐに帰村した。クラーは、用意した品物を売るだけではない。あがった儲けを使ってさらに別のものを行く先々で買い、他所で売る。これを繰り返す。だからどんどん遠くへでかける。ずっと長く村を出払うことになるが、最終的な儲けはわれわれと大差あるものではなかった。クラーが行商にでたのは12月である。クラーの人びとは、多くがラオの妻を得ていたので水田耕作もしていた。彼らは雨季になると外へでない。だが、われわれは田植が終ってすぐにでかけることもあった。売るのがあればでかけた。鍛冶師も一緒にでかけた」。

東北タイのラオが行った行商といえば、従来ナーイ・ホーイが知られる。商品米の急激な需要をもたらしたボウリング条約 (1885年) 以降、農閑期に水牛や牛を集めてナコンラーチャシーマーへ集団で売りにでた人びとがいる。その活動は、上のような小規模な行商を組織化したものである。したがって誰もがナーイ・ホーイであったわけではない。当地においては、ナーイ・ホーイとは一時的であれ組織的な行商活動の主導者をさす名辞である。一人の長と複数名の雇われ助手が隊をなして行動する。ナーイ・ホーイには牛車やフア・カセーンと呼ばれる運搬用舟艇 (14) を調達し、各地に物を買付ける経済的余裕と旅程上の判断力が必要とされた。ムーン川流域の広範囲の集落で、今日も古老たちが「勲章をもらっている男」と語りつぐ、数名のナーイ・ホーイが確認される。牛車と運搬用舟艇数隻を所有して水牛行商隊とウボンの精米所へのコメ配送 (15) をとりしきっていたナーイ・ホーイ・スック (故人) とその一族であ

る【図】。彼らは水稻耕作者であったが、ナーイ・ホーイになれた者は父親がナーイ・ホーイの場合だけであったとする見方もある。元手がいるためである。かつてナーイ・ホーイの雇われ助手として水牛行商隊に数回同行参加した経験をもつ古老は次のようにいう。「当時、ラオの男たちは皆ナーイ・ホーイになりたがった。しかし、なれなかった。ナーイ・ホーイの条件とは、収量の良い水田があって勤勉、そして『儉約家 kin khao kamakok』であること。危険な仕事でもあったから勇敢でなければ務まらなかった」。

かつてスキナーが指摘したように、地方における華人の経済的役割がその種類、程度において飛躍的に拡大するのはボウリング条約以降のことである。現在の古老が回想する当時のラオの行商活動は、その華人の影響を得た地方内部での交易増加という時代を背景としていることに留意する必要がある [Skinner 1957: 107-108]。「余剰米がないと（行商用製品の）買付けができなかった」といわれるように、現時点でナーイ・ホーイが語られる背景には、コメもしくは余剰の産品が、市場にでまわりはじめた商品（服、染色剤）を入手する手段として認知されていたことによる。雇われ人夫でなくナーイ・ホーイのような高利潤を生む隊商を組織できなかった多くの人びとは、販売のためにナコンラーチャシーマーやバンコクに売りにでることは困難だった。それ故に余ったコメ（ウルチ種）は華人の経営する精米所へ売りにだされた。また、自村やその周辺に余っているコメを買い、他所へ売りにでかけた例も多い。1930年代から40年代にかけて村内で余るコメを1セーン（120kg）当たり1～2パーツで購入し、それを10サルン（2.5パーツ）で売る。さらに、実際に扱われたのはコメだけではない。ある者は、コメを買い集めそれぞれの村に設置したコメ倉に収納後に、複数の集落で綿布、白絹布、糸なども同時に調達し、東北タイはもちろんバンコクまで売りにでかけた経験をもっている。そして年に2～3回はそうしたことを繰り返している。

東北タイにしろれるナーイ・ホーイには、水牛を中部タイへ売りにでるのをナーイ・ホーイ・クワイ、舟を使って余剰米を売るものをナーイ・ホーイ・フア nai hoi hua [rua]というさまざまなタイプがあった。さらに、牛車をもち、綿やたいまつなど、それぞれの集落の産品を集めて他所で売りにでたプータイは、ナコンパノム周辺の集落ではナーイ・ホーイ・クィアン nai hoi khwian として知られている。ナーイ・ホーイの名辞が与えられるのは、いかなる理由か、東北タイではタイ語系の話者であるラオとプータイのみである。あるいは、両者ともに、クラーや前出のスウェイと異なり機動力をもって行商をしている。

b. コメ品種

クラーはまた、集落の寺院に多大な貢献をしている。建造物を修復したり、ビルマ側からもってこさせた経典を献納している。さらに、ラオの集落に新しい食習慣をもたらした。野菜の煮込み、ハンレーと呼ばれるゴマ油を使った豚肉料理、喫茶、バナナ葉のロングサイズ葉巻煙草、そして「カオ・チャオ・クラー」とよばれるウルチ米である。この名称は、クラーの婿入例がなくとも、何らかのかたちで彼らと接触をもったラオ人集落には広く語りつがれている。

NY村 [T. KY, A. Khuang Nai, C. Ubon Ratchathani]

【B氏／男子／1913生】

クラーはここに暮らすようになって、寺院を作った。その寺はワット・トゥン・クラーとよばれる。わたしが15歳のときだった。そして寺院ができたその年に、自分の両親（ともにラオ）はクラーが植えていたカオ・チャオ・クラーを植え始めた。以後、わたしの家族は朝と昼はモチ、夜はウルチをとるようになった。当時耕作していた水田の2割ほどを植えた。その他は、7割がモチ種で（内訳：6割が品種名 *khao i*、1割が *tom khao do*）、あと1割がそれまで植えていたウルチ種（*khao cao phounthong* = *khao daeng*）だった。この割合は（政府推奨品種が広まった）最近まで、ほとんど変わることはなかった」。

どのように呼ばれる民族であろうと、東北タイでコメを作る人びとは、土地の高低、雨水の多少、土壌の質を基本的な尺度に、田圃の良し悪しいし特徴を詳細に類型化してきている。一般に最上の田圃（水田）とは、低位で豊かな地味をもつ所である。かつては、当然のことながら、さまざまに分類される地所にもっとも適したコメ品種が選択的に求められ、植えられてきた。ただし、政府が推奨する品種が広まった現在ではそうした在来種は、一部を残してほとんどみられなくなっている。

【表2】は調査対象となった集落において、60代半ば以上の高齢のインフォーマントにたいして、約50年前に植えていた品種は何かと問うた結果である。1930年代から40年代にかけて東北タイで植えられていたコメ品種の「民俗名」を記載している。すでに消え去ってしまっているにも関わらず、質問に応じたインフォーマントはほとんど例外なく品種について驚くべき鮮明な記憶と詳細な知識をもっており、ある者は個々の品種について、形象、色、手触りから味、保存状況にいたるまで、自己が扱ってきた他品種との比較の観点から詳細なコメントを与えている。インフォーマントの半数以上がラオであったために、表ではモチ品種名が優越する。だが、モチ種を主食としてきたのはラオとプータイ、クメールはウルチ種を主食としてきたことが顕著に示されている。ラオとプータイは、品種名をあげるときモチ種の品種名には粘りを意味する「ニニアオ」を入れず、ウルチ種に言及するときは例外なく「チャオ」を

つけて個々の名を続けている。

表が示すように、ラオやブータイはモチ種を主食とするが、少数ながら必ずウルチ種が植えられている。しかもその品種はほぼ同じカオ・チャオ・デーン[U003]である。これは儀礼のときに作るコメそうめん (khao pun; khanom chin) 用のために植えられたと回答されている。そして逆に、ウルチ種を主食とするクメールが、同様の理由でモチ種を菓子用として植えている。儀礼食用として主食とは異なる品種がそれぞれに継承されてきたことがわかる。つまり、その生活様式にあって、それぞれの言語集団では二種類のコメが植えられている。

さらに興味深い結果は、ほとんどの陸稲品種のモチ米がラオ（8例）とカルーン（7例）によって植えられていたのにたいし、陸稲品種のウルチ米はクメール（8例）において卓越していることである（陸稲栽培にみる主食品種の卓越例）。そして、水稻品種で早稲種のモチ米を数多く植えているのはラオである。唯一スウェーを除く東北タイの言語集団はコメを分類する基準に、カオ・ドー（早稲）、カオ・カーン（中稲）、カオ・ナックないしカオ・ンガーン（晩稲）をもっている。いうまでもなくこの区別は相対的なものである。ある集落で早稲として植えられる同じ名前の品種が、別の集落では中稲であったりする。同様に、中稲が他のところでは晩稲として植えられていたりもするからである。にもかかわらず、旱魃の年にも収穫できる早稲種を数多く植えていたことが示されている。モチ種の[M019、M025]はその代表で、畑のような地所ないし森林のなかにつくられた水田 (na dong) のような水条件が悪いところでも、二ヶ月で収穫できるコメとして語られている。

そして【表2】中に「→」を示してある品種は、ある言語集団から別の言語集団へと紹介されたことを示している。つまり、クラーがラオにもたらしたウルチ種のカオ・チャオ・クラー[U007]やモチ種のカオ・パマー[M106]のみならず、それらの品種はどこの人びとからもたらされたものか、かなり明瞭に記憶されている。ラオのいくつかの集落では、ブータイから陸稲モチ米の早稲種を得ている[M023、M037]。また、クメールはモチ米のある品種[M040、M099]だけではなく、彼らの主食とする水稻ウルチ米の早稲種[U015、U027]、陸稲ウルチの中稲種[U019、U025、U028]などをラオから得ている。事例数が限られているので示唆・推測の域を越えるものではないが、よりよい耕地探しのために、行商もしながら各地を動き回ることを余儀なくされた人びとこそ、コメ品種の交換や見知らぬ集落への紹介の機会を多くもつことになった。乾燥地としてのコラート高原上のコメ耕作状況を考慮すると、そのような移動と交渉のネットワークこそ、東北地方の周縁地域にまでコメ地帯を拡大したラオの開拓状況を生み出したと考えられるのである。

こうした在来品種はそのほとんどが1960年代に東北タイから姿を消した。一例をあげると、シーサケート県のあるクメールの集落では、かつての自家消費用であったウルチ種[U015]は、現在では全国どこにでもあるカオ・ドーク・マリにとってかわられている。洪水にも強かったと回顧されるこの品種は、行商でやってきたウボンのラオ人がその集落にもたらすまで、存在をしられていなかった。当時では、クメールが以前から植えていた陸稲種[U016、U017]が好まれていたが、1960年代の初めに換金作物として入ったケナフの栽培のために、畑地を譲りいずれもなくなってしまっている。他の集落においても、およそ在来種の消滅は、多くの場合それが暮らし向きをよくするか（金になるか）否かによって取捨選択されてきた。政府が推奨する品種が現在植えられているのも、収量の増大という点で明らかに改善された点が入りによって認められてのことなのである。もっとも、在来種の風味を懐かしむ人びともいて、自給用にわずかばかりの在来種を残す集落も言語集団の違いを問わずにあるが、いずれにせよ減少の一途をたどっている。

在来品種は、中央政府から遠く離れた東北タイという「地域」でかつて展開されていた民族間関係を刻みこんでいる。同時にその消滅過程は、生活様式の均質化とともに首都中央の政策や市場経済の強力な影響を明瞭なかたちで映している。結果的に、東北地方における人びとを相互に差異化する尺度が、言語、慣習を含む文化上の相違よりも、以前にも増して身につけるもの、耐久消費財などの有無といった暮らし向きを映す経済的な状況の相違ないし優劣という観点から与えられる傾向を一層強くしている。同地方で新参者のラオは、自給自足の社会生活を足場にしてさらなる富を得る活動（土地転がしや行商）に長じた人びとであった。その文脈では、かつてラオスのタイ・ルーの移住過程を検討したイジコヴィッツが、収穫米を増加させる田圃のみならずより高い地位を求めての移動を彼らの社会のなかにみたことは[Izikowitz 1963: 180-82]、東北タイのラオの場合にもそのまま該当するように思われる。そして、それを望んだ隣人たちは、ことごとくラオを羨ましくも望ましい同地域に生きる模範とした人びとである。その点では、行商活動に携わってきたラオ（加えて少数ながらプータイ）は、全般的にみてそうではないスウェー、クメールやカルーンよりも、自己を社会的地位に関して優位な立場にある者とみている。彼らが、今日の地方アイデンティティであるイサーンを名乗る主要な人びとである理由のひとつが、そこにあるように思われる。

むすびにかえて 一民族間関係のなかの地域一

ラオスのラオ人官僚は、目下好調な経済成長を続けるタイ国に援助を乞うと同時に、メデ

ニア、消費文化を通じて与えられるタイ側からの影響に強い危機感をも抱いている。実際に政府は、国境の観光土産村ではタイ・パーツを使わせないようにしている。市内ではタイ語のカラオケがしばしば禁止される。しかし、現実是这样した国とは別に、安定したタイ通貨を保持したがるラオ人が増加する一方である。ラオスの地方農村を歩いていても、方角がわからなくなれば家屋上の竹に添え木されたアンテナをみればよい、という。自家発電器をもってテレビをみる集落は存外に多く、そのアンテナが皆同一方向を向いている。その先はタイ（東北タイ）なのである。ラオス政府はタイから流れてくる電波を妨害波をだしはするが、その力は弱く、当の住人たちは国営放送より面白いといっている。役職者といえど、口実をつくってタイ国側に渡り、私腹を肥やす者も多い。ただし、東北タイのラオ人との関わりは個人経験の域をでることではない。人びとは「ラオ」についての教条主義的な理屈も注釈も必要としてはいない。こうした状況を熟知するゆえにこそ当局は苦慮している。

1994年4月8日にタイ東北地方の国境の町ノンカイとラオスの首都ヴィエンチャンを結ぶ「タイ・ラオス友好橋」が開通した。翌年5月までに64527台の車がタイ側からラオスに入り、利用者は95年1月から5月中旬までの間で111951人にのぼる [Bangkok Post 1995a]。この橋の名称が示唆するように、ラオスとタイは密接な関係に入りつつある。経済関係にもそれは顕著である。1986年以降、貿易や直接投資といった民間経済交流のみならず、政府間経済協力関係も着実に緊密化してきている。1992年2月19日にはタイ＝ラオス友好協力条約と観光協力協定が締結された。タイは額面でも件数でも、対ラオス外国投資全体の42パーセントを占める。タイ企業は製造業、輸出入業務、木材加工等にわたり投資を実施し、その総プロジェクト数は1995年10月現在で229件、投資総額は19億ドルにのぼる [Bangkok Post 1995b]。

ラオス市場経済の主導者タイは、経済関係のさらなる拡大を求められている。1995年1月にヴィエンチャンで第5回タイ・ラオス合同委員会が開かれた。タイがラオスから輸入する大豆、ジュート等16種の農作物にたいしてかけている20パーセントの関税をさらに引き下げること、ノンカイ－ヴィエンチャン間の鉄道敷設計画の調印式の年内実施、96年中にはサワンナケートにタイ総領事館、コンケンにラオス総領事館を設置すること等が確認された。ラオスがタイへ輸出する電力量についても、十年以内に現行の1500メガワットから2500メガワットに増量することで一致した。そして両国を結ぶ第2のメコン国際橋を東北タイ側のルーイ県から架設することでも合意がなされた。

両者の関係は経済・商取引ばかりではない。友好橋の開通以前の1993年9月に、ヴィエ

ンチャンで非営利団体「タイーラオ協会」が設立され、企業家、政府官僚のみならず大学関係者も名を連ねて定期的な経済、社会、学術・文化交流が行われている。1995年11月には同協会とラオス側の「ラオス・タイ友好協会」の共同主催でルアンパバンの中座スカーラム寺へのパーパー儀礼（出安居後の黄衣献納）が実施された。このきわめて良好なタイとラオス関係は、1986年に社会主義国ラオスが自由主義経済原理を導入することを採択し88年に時のタイ首相チャチャイが「インドシナを戦場から市場へ」と謳って以降のことである。第二次世界大戦以降ラオスが「30年戦争」を経て社会主義化した前後では、国境を接する両国はたえず緊張・断絶状態にあった。メコンを挟んでの紛争が88年前半まで続いたことを思えば、両国間の距離は90年代以降、猛烈な勢いで縮まったといえる。

さらに巨視的に近年のインドシナの各国間の相互関係をみれば、中国の参入もあってメコンを挟む各国間は自由市場、経済協力を旗印に急速に接近している。各国を陸路で縦断できるのも時間の問題である。タイは先日アセアンに参加したヴェトナムとともに、経済援助、観光政策を通して同地域のオピニオン・リーダー的な役割を担っている。こうした状況を映すかのように、昨今のタイでは今世紀初頭に刊行された欧米人によるインドシナ関係の古典的な旅行記のリプリント版や、最近ラオスやカンボジアを訪れたタイ人ライターの視察旅行に基づくエッセー、ガイド本が相次いで出版されている。過去の出来事を現代の体裁で復元し、地域の紐帯をそこに築き上げているかのようにみえる。

タイ＝ラオ友好橋開通の祝辞において、16世紀に建立されたルーイ県のタート・シーソン・ハックが両国の友好を語る歴史表象としてとりあげられた。近年、増加しつつあるタイ国人ライターのラオス旅行記でも、タイ国とラオスはキョウダイであり、かつて流された苦い涙は甘い蜜に変わったと謳っている [Khachatphai 1994]。インドシナはまさしく戦場から市場へと大転換をとげつつある。こうした潮流と呼応して、北タイとともにメコンと接する東北タイの観光政策にもわかに活気をおびてきている。東北タイは、中部タイとの接点をなす商業の中心地ナコンラーチャシーマーを除き、外貨を得る観光地としては国内で最も遅れをとった。スリンの象祭りは60年代に始まるが、もっぱらウドンのパンチェン遺跡、古クメールの寺院旧跡など文化史跡を喧伝するに留まっていた。国内需要をにらんで県単位に観光収入をもたらす「郷土の伝統行事」が70年代後半から促進され、ロケット儀礼（バンファイ）はヤソートン、入り安居儀礼のロウソク祭りをウボン、コンケンに絹祭りなど、それぞれ趣向をこらして「伝統」をつくりだした。観光局の支所も最近できている【表3】。だが、観光収入があるのはその時に限られる。メコン川を臨む国々が地域の観光振興を総合的な経済戦略とし多くの開

発協定にかんする調印をした現在、とくにラオスとの友好関係を通じて、ムクダハーン、サコンナコン、ナコンパノムの三県を管轄するタイ観光局ナコンパノム支局は、メコン・クルージング・ツーリズムを計画している。ナコンパノムからラオス側へは1日10回の定期フェリーが巡航可能である。河を挟んでの買い物と眺めが売りものになるという。

政治的に分断された民族と国家の狭間に、人びとによって生きられてきたそれぞれの「場」がある。ラオスの革命党員によれば、ラオスで生まれ東北タイに暮らした人びとが、内戦を経てヴィエンチャンやパークセーを訪れたとき、すでに老境に入った彼らはその地に入るなり足下の土を指でつまみあげて頭にかけていたという。同氏は、この行為はまた故地ラオスへ戻りたいということだという解釈を与えている。ラオスが解放を果たした1975年、汎ラオ主義にもとづくイサーン回復運動が一部のラオ人によって主張された。だが、当時の状況を知るラオ人によれば、その政治的可能性について誰もが懐疑的であったという。東北タイとラオスが統合されること自体については、民族の文化的紐帯の確立という点では望ましいが、もしそうなった場合タイ側のラオ人が多数含められることになり、ラオス側のラオ人は実質的な政治的統率力を失うであろう、だからそれはよい選択ではない、と結論されたといわれている。

同時に、第二次世界大戦後から1975年までの「30年戦争」を生き抜いてきた年輩のラオ人女性には、レイプや交通事故が日々起こり、エイズの温床といったネガティブなまなざしを現在のタイ国に向ける人が多い。メコンの兩岸を往来する舟は多いが、一度たりともタイ側へ渡ったことがないという人びとも少なからずいる。内戦の時代以降に生まれ育ったふたつのラオ人社会の若者たちは、国境観光を促進する両政府間が謳う「タイとラオはキョウダイ」という、相互の出自を明らかにする喧伝文にほとんど関心を示すことがない。それは自明のことであると同時に、余りにも違いすぎる双方の違いをみせつける指標ともなるからである。今日「パーツ経済圏」が拡大浸透するなかで、彼らは「民族」なる幻想をそれぞれの用法で使うことはあっても、信じてはおらず、共有される日常の社会経験をこそ重視している。両国のラオの新世代人がひとつになる途があるとすれば、それは幻想としての民族の同一性を越え、国家の境界も解消させる文化としての消費主義においてであるかもしれない。現在のタイ人を、そしてイサーンの若者を虜にしている消費主義は、隣国ラオスのラオの人びとにも共通してみられるものである。その強力な媒体が、ふたつのラオ人社会の間に従来の国家－民族間関係とは異なる新しい地域間関係を演出しつつ生みだしてゆくとみることは、少なくとも現状を大きく見誤ってはいない認識であろう。しかし、それはラオ人のみならず、われわれをも捕えてきた予断を許さぬ媒体である。生きられる「場」の構成因子は常に両義的である。

注記

- (1) 例えば『サイアム・アルマナック1992-94』中の「民族 chattiphan 一覧」では、タイ族、タイ・ルー、タイ・ダムなどがタイ国内の民族として記載されているのにたいし、東北タイのラオ系住民に該当するものでは地域・地勢的なアイデンティティを基礎にした「タイ・コラート」のみをあげる。もっともこの一覧表は「タイ国内の民族」としながら、タイ国外の民族名を列挙するという奇妙なものではある [Samrit 1995: 174-76]。『仏暦2525年学士院版国語辞典』では、タイとはタイ国人であり、ラオとはラオスに住むタイ人の一支派とする [RBS 1982]。
- (2) 例えば「あなたは何族ですか (sonphao dai)」と尋ねると、ラオ・ルム、ラオ・トゥン、ラオ・スーンのいずれかで回答される。なお、この三分法はラオではなく最初に王党派についたメオ族のリーダーが提示したことによるともいわれる [Ovesen 1993: 32]。
- (3) 筆者が1990年に調査で訪れた際には68、翌年は38と聞いている。92年時点では「確実な統計をだせるのは首都圏を含む全17県のうち2県にとどまる」という実情も耳にした。精確な民族総数などでようがないことを関係者は熟知している。サラワン県ラオガム郡で面会した当地出身の郡長は「14の行政区よりなる当郡では調査の結果、構成民族数は25」という。個別名を聞くと16で挙げてあとは答えに窮した。これが民族である。政府の役職者は、筆者のような外国人に正しい対応をしている。なお、タイ国内での「民族」認知の為政者レベルでの経緯については、村嶋の重要な論考がある [村嶋 1996]。
- (4) この見方は、示唆的である。今日の国家領域としてのタイは、海域世界に接近することで、かつてのタイの居住環境を自らの周縁（辺境）に位置づけ、結果的に港市国家一領域国家としてのシャムないしタイを構築しえたという逆説を教えるからである。なお、1826年のバーネイ条約で用いられた「国」の名称はムアン・タイ、クルン・タイであった。ボウリング条約の批准の年（1856年）にあたり、西欧人の間で通称であったシャムが国名として採用された [オイレンブルグ 1990: 25-26頁]。周知のように国名はその後、タイ（1939-45）、シャム（1945-46）、タイ（1946～現在）と変更された。
- (5) 前掲の『ラオ国語辞典』は、「人間、偉大なる優れた人」という意味をタイにあて、二番目に「タイ国、タイ国人」をあてている。
- (6) カイズはこれを従来の関係を変節させシャムが「ラオ」を解体し自らをシャム・タイとして確立してゆく嚆矢とみている [Keyes 1967: 9]。
- (7) 同時期にエメラルド仏とともにもちだされたパバーン仏は、四年後（1782年）にバンコク王朝を開くラーマ1世によりルアンパバーン国へ返還される。だがラーマ3世がアヌ・ウォン王の乱を鎮圧した際に同仏像は再びタイ側へもちさられた。最終的にはラーマ4世が1867年に返還して現在に至る（本文以下参照）。今日同仏の現物はヴィエンチャンにある国立銀行の金庫ないしはモスクワに保管されているという。旧王宮（現博物館）に納められているのはそのレプリカである。
- (8) 東北タイでは、南部のクカン、シーサケート、ヤソートン、スワンナブーム、カーラシン等、主に旧チャンパサックのそれぞれのムアンでこの新政策が実施された。ラオスの知識人マユリーは、ラオ側にシャム拡大政策への危機感があったためと、アヌ王の反乱を正当なるものとして再構成している [Mayouri 1989: 58]。
- (9) 「民族文化保護政策」が1991年3月開催の人民革命党第五回大会で提唱された後の8月に解放後初の憲法が採択された。憲法第一章第8条には「全民族は、自身および国家 (sat)

の文化習慣を保存振興する権利を有する」とあり、同条最終文章に「政府は（全項において）あらゆる民族の経済社会的レベルを徐々に伸張向上させるために尽力する」とある。第13条にも同様の表現がある。そして、それらはハックサート（愛国）のモチーフ（第19条）に収斂されている。全民族が同様の人権もつという主張は、「民 pasason」ということばがほとんど「全民族 banda phao」と対で使用されている（第1章第2条）ことから明らかである。ちなみに、憲法には「社会主義」という言葉がない〔以上、SPS 1991〕。また、第30条において「ラオ国民は宗教の信仰、不信仰の自由をもつ」と明記するが、憲法発布後国章はかつての槌と鎌から国宝の仏教寺院タートルアンに変更されている。

- (10) 例えば、東北のラオの民俗書を多数著わしてきたウボン市在住のP氏や、チャンパサック王家の末裔で、近年新たに年中行事化したウボンのラックムアン儀礼を司るヤソートン市在住のB氏などは、地元ではラオ賛美者として知られている。しかし、今日の中央当局からは危険視されるところか、地方伝統文化に精通する郷土の文化人として扱われている。
- (11) 以下で使用する資料は、日本学術振興会拠点大学プログラムからの資金援助を得て筆者が1992年12月、93年10月から12月にかけて実施した「東北タイにおけるラオ農民史における民族間関係」に関する現地調査で得られたものである。調査期間中に聞き取りを実施した集落は、東北地方5県におよぶ総数34か村（ヤソートン〔17〕、ウボン〔8〕、シーサケート〔3〕、サコンナコン〔5〕、ナコンパノム〔1〕）である。そのなかに含まれる言語集団は、ラオ、プータイ、クメール、スウエイ（クイ）、カルーン、ニョー、ヨーイ、ソー、およびクラーの末裔である。
- (12) 部族間の抗争ではこの壺が壊されたり掠奪されたりする。また、その分与継承をめぐる民族内の分裂を促す要因ともなる。カラム（タブー）を犯したといいがかりをつける理由ともなる。前世紀後半の中部ベトナム高原でのモン＝クメール諸語族における同様の事例についてヒッキーを参照〔Hickey 1982〕。
- (13) チュラーロンコーン大学アジア研究所講師スネート氏の教示による。Judson's Burmese-English Dictionary 1953(revised ed. 1966) p. 194 では「カラー」には a) a native of any country west of Burma; b) a foreigner とある。次にくる「カラー・パ・ユ ka la phayu」には、a white foreigner <American, European> とある。pha yu とは「白」。
- (14) フア・カセーンは標準規模のもので12ソーク×12ソーク（6メートル幅／高）、積載重量5000ムー（60トン）、舟内で12-13人が寝れたという。本文中のナーイ・ホーイ・フアは積載量78トン級を3隻常時保有し、最盛期には66トン級2隻を借りて計5隻を使用していた。貸し手は舟はもつが各地にコメ買付けをする元手をもたなかった。借り賃はムーあたり1パーツ。ハーブ単位で5パーツ（1940年代）。
- (15) ナーイ・ホーイ・スックが持ち込んでいたウボンの精米所は、その未亡人の記憶によると、買値を取り決めていた Rong Si Pia Phao, Rong Si Sun Siang の2カ所である。ウボン全体では1940年代時点で5カ所の精米所があった。なお、1931年時点で東北タイ全体に存在したのは30-40トン級の華人経営による33カ所という〔cf. Ingram 1971: 70〕。

文献

Amorawong Wicit, Mom

- 1963 "Phongsawadan Huamuang Monthon Isan". in Prachum Phongsawadan phak 4 lae
Prawat thongthi Changwat Maha Sarakham, Maha Sarakham: cremation volume
(「東北州年代記」).

Bamphen na Ubon (ed)

- n. d. Prawat Yasothon, Yasothon: Sala Klang Changwat Yasothon (『ヤソートーン史』).

Bangkok Post

- 1995a (daily) 5月18日付

- 1995b (daily) 11月3日付

Breazeale, K.

- 1975 "The Integration of Lao States in the Thai Kingdom," Ph.D. dissertation,
Oxford University.

Briggs, Lawrence Palmer

- 1949 "The Appearance and Historical Usage of the Terms Tai, Thai, Siamese and
Lao," Journal of the American Oriental Society 69: 60-73.

Brown, David

- 1994 "Internal colonialism and ethnic rebellion in Thailand," in his The State
and Ethnic Politics in Southeast Asia, London: Routledge, pp. 158-205.

Chayan Wanthanaphut et al. (eds)

- 1991 Raingan kan prachum thang wichakan: Kan wichai thang chattiphan nai Lao-
Thai, Chiang Mai: Sathaban Wichai Sangkhom Mahawitthayalai Chiang Mai (『研
究集会報告ーラオスとタイ国における民族学的研究』).

Chazee, Laurent

- 1995 Atlas des ethnies et des sous-ethnies du Laos, Bangkok.

Chit Phumisak

- 1992(1976) Khwam pen ma khong kham sayam Thai, Lao lae Khom lae Laksana thang
Sangkhom khong chu chonchat. Samnakphim Sayam (坂本比奈子訳『タイ族の歴史』
井村文化事業社 1993).

Cohen, Erik

- 1991 "Bangkok and Isan: The Dynamics of Emergent Regionalism in Thailand," in
his ed., Thai Society in Comparative Perspective, Bangkok: White Lotus,
pp. 67-88.

Cordell, Helen (ed)

- 1991 Laos [World Bibliographical Series 133], Oxford: CLIO Press.

Damrong Ratchanuphap

- 1974 Nithan Borannakhadi, Krungthep: Khlang Witthaya (『故事伝承』).

Dodd, William C.

- 1923 The Tai Race, Elder Brother of the Chinese, Iowa: Cedar Rapids.

Halpern, Joel M.

- 1964 *Government, Politics, and Social Structure in Laos: A Study of Tradition and Innovation*, New Haven: Yale University.

Hayashi, Yukio

- 1995 "Notes on the Inter-ethnic Relation in History: With Special Reference to Mon-Khmer Peoples in Southern Laos," Paper presented at the Seminar on "Ethnic Groups in Sakon Nakhon", 3-5 July, Ratchaphat Institute of Sakon Nakhon, pp. 1-26.

林 行夫

- 1985 「開拓村（ウドンタニ県北モー村）訪問記」『東南アジア研究』 23(3): 280-294.

- 1994 「『まなざし』のなかの民族と異文化—南ラオス調査から」『民博通信』65: 33-41.

- 1996 「南ラオスにおける民族間関係」綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいラオス』弘文堂、pp. 80-92.

印刷中 「信仰—ウィサー・境界・地域」『総合的地域研究・東南アジアをきるキーワード』所収

Hickey, Gerald Cannon

- 1982 *Sons of the Mountains: Ethnology of the Vietnamese Central Highlands to 1954*, New Haven: Yale University Press.

Ishii Yoneo et al. (eds)

- 1990 *Datchani khonkham nai Kotmai Tra Samduang* [The Computer Cocordance to the Law of the Three Seals (5 vols)], Bangkok: Amarin Publications.

Ingram, James

- 1971 *Economic Change in Thailand: 1850-1970*, Stanford: Stanford University Press.

Izikowitz, Karl Gustav

- 1951 *Lamet: Hill Peasants in French Indochina*, Goteborg: Elanders Boktr.

- 1962 "Notes about the Tai," *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities* 34: 73-91.

- 1963 "Expansion," *Folk* 5: 173-185.

- 1969 "Neighbors in Laos," in Barth, Frederik ed., *Ethnic Groups and Boundaries*, Boston: Little, Brown and Co., pp.135-148.

Kerr, Allen D.

- 1972 *Lao-English Dictionary* (2 vols), Washington, D.C.: The Catholic University of America Press.

Keyes, Charles F.

- 1966 "Ethnic identity and loyalty of villagers in Northeastern Thailand," *Asian Survey* 6: 362-369.

- 1967 *Isan: Regionalism in Northeastern Thailand*, Ithaca: Cornell University Data Paper.

- 1976 "In Search of land: Village Formation in the Central Chi River Valley, Northeast Thailand," *Contribution to Asian Studies* 9: 45-63.

Khachatphai Burutphat

1994 Lae Lao, Krungthep: Samnakphim Phrae Phitthaya.

Khambai Yundalat

1991 "Khvam samphan thang chattiphan phao nai prathet Lao", in Chayan Wanthanaphut et al. eds., Raingan kan prachum thang wichakan: Kan wichai thang chattiphan nai Lao-Thai [Ethnic Studies in Laos and Thailand], Chiang Mai: Sathaban Wichai Sangkhom Mahawitthayalai Chiang Mai, pp. 21-31 (「ラオスにおける民族間関係」).

Ko Sawatphanit

1990 Isan mua wanwan, Krungthep: Phi Wathin Phaplikhechan (『昔日の東北タイ』).

KSLP (Krom Sinlapakon)

1989 Muang Ubonratchathani, Krungthep: Krom Sinlapakon (『ムアン・ウボン誌』).

Lebar, Frank M. et al. (eds)

1964 Ethnic Groups of Mainland Southeast Asia, New Haven: HRAF Press.

Leach, Edmund R.

1954(1964) Political Systems of Highland Burma (second ed), London: London School of Economics and Political Science (関本照夫訳『高地ビルマの政治体系』弘文堂 1987)

Luangwicit Watthakan

1962 "Patthakatha ruang khong di nai phak isan," in Krom Sinlapakon ed., Nippon bang ruang khong Phontri Luangwicit Watthakan, cremation volume for Phontri Luangwicit Watthakan, pp. 177-193 (「講演・東北地方の風物」).

前田成文

1989 「ベフディーベツィミサラカ族とシハナカ族の狭間で」『東南アジア研究』26(4): 417-429.

Mayoury and Pheuiphanh Ngaosyvathn

1989 "Lao Historiography and Historians: Case Study of the War between Bangkok and the Lao in 1827," Journal of Southeast Asian Studies 20(1): 55-69.

1994 Kith and Kin Politics: The Relationship between Laos and Thailand, Manila: Journal of Contemporary Asia Publishers.

MCC (Ministry of Commerce and Communications)

1930 Siam: Nature and Industry, Bangkok: Bangkok Times Press.

McCarthy, James

1900 Surveying and Exploring in Siam: with descriptions of Lao Dependencies and of Battles against the Chinese Haws, London: John Murray.

Miller, Carolyn

1994 "Perceptions of ethnolinguistic identity, language shift and language use in Mon-Khmer language communities of Northeast Thailand," Mon-Khmer Studies: A Journal of Southeast Asian Language 23: 83-101.

三谷恭之

1984 「東南アジア諸言語の系譜」大林太良編『東南アジアの民族と歴史』山川出版社、pp. 58-78.

村嶋英治

1996 「タイにおける民族共同体と民族問題」『理想』1996年5月, pp. 187-203.

NGD (National Geographic Department, Vientiane)

1995 Atlas of the Lao P.D.R. Vientiane: National Geographic Department.

大林太良 (編) 『東南アジアの民族と歴史』山川出版社

オイレンブルク、大西健夫編訳

1990 『オイレンブルク伯「バンコク日記」ードイツ、アジアで覇権を競う』リポート
ト、1990年

Ovesen, Jan

1993 Anthropological Reconnaissance in Central Laos: A Study of Local
Communities in a Hydropower Project Area, Uppsala: Dept. of Cultural
Anthropology, Uppsala University.

Pheuiphanh, Ngaosyvathn

1985 "Thai-Lao Relations: A Lao View," Asian Survey 25: 1242-1259.

Pricha Uyatrakun and Kanok Tosurat

n. d. Sangkhom lae Watthanatham khong Cao Bon [Kan sukxa klum chattiphan nai
prathet thai], Krungthep: Samakhom Sangkhommasat haeng prathet thai (『チャ
オ・ボンの社会と文化』).

RBS (Ratchabandit Sathan) ed.

1982 Photchananukrom chabap ratchabandit sathan pho so 2525, Krungthep: Samnak
phim Akson Charoenthat (『仏暦2525年学士院版国語辞典』).

Samrit Miwongukhot (ed)

1995 Sayam Omanaek 2535-2537, Krungthep: Sayam Banna (『サイアム年鑑』).

Scott, Sir J. George and Hardiman, J. P.

1900-1901 Gazetteer of Upper Burma and the Shan States, Part 1, 2 vols; Part 2,
3 vols. Rangoon: reprint of AMS.

Seidenfaden, Erik

1958 The Thai Peoples: The Origins and Habitats, Bangkok: The Siam Society.

Skinner, William J.

1957 Chinese Society in Thailand: An Analytical History, Ithaca: Cornell
University Press.

SPS (Sapha Pasason Sungsut) ed.

1991 Latthammanun haeng Sathalanalat Pasathipatai Pasashon Lao, Viangchan:
Sapha pasason sungsut (ラオス最高人民会議編『ラオス人民民主共和国憲法』).

Srisakara Vallibhotama

1990 Aeng Arayatham Isan: Chae lakthan borankhadi Phlik chom na prawattisat
Thai, Krungthep: Samnakphim Matichon [in Thai and English] (『イサーン文
明の源流』).

Stuart-Fox, Martin

1986 Laos: Politics, Economics and Society, London: France Pinter Publishers.

- 1996 *Buddhist Kingdom, Marxist State: The Making of Modern Laos*, Bangkok: White Lotus.
- Sucit Wongthet (ed)
- 1995 *Mukdahan Muang Muk Maenam Khong* [thiraluk nuang nai phithi poet rongraem Mukdahan kraaen hoten], Krungthep: Samnakphim Matichon (『メコン川岸の真珠市ムクダハーン』).
- Surasak Montri, Chom Phon Chaophraya
- 1926 *Nirat Muang Luang Phrabang lae Rai ngan prap Ngiau* (phim nai ngan chalong aayu Chom Phon Chaophraya Surasat Montri khrop 75 pi, pho so 2469), Krungthep: Rongphim Sophonphiphanathanakon (『ルアンプラバーン国紀行およびギアオ(シャン)征伐報告』).
- Suwilai Premsrirat and Naraset Pisitpanporn
- 1996 "Language and Ethnicity on the Khrat Plateau," paper presented at the Workshop on 'Dry Areas in Southeast Asia', held at Kyoto, 21-23 October, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University.
- Textor, Robert B.
- 1967 *From Peasant to Pedicab Driver*, New Haven: Southeast Asian Studies, Yale University.
- Thawisin Supwatthana
- 1988 "'Lao' nai thatsana khong phu pokkhrong Thai samai Rattanakosin," *Maha Sarakham: Srinakharin Wirot University* (「ラタナコーシン期のタイ為政者による『ラオ』観」).
- Thongkam Onmanison
- 1992 *Watchananukom Phasa Lao*, Wiangchan: Toyota Foundation (『ラオ語辞典』).
- Toem Wiphakphotchanakit
- 1970 *Prawattisat Isan* (lem thi 1 and 2), Krungthep: Samnakphim Samakhom Sankhomasat haeng Prathet Thai, 1970 (『東北タイの歴史』).
- Wijeyewardene, Gehan (ed)
- 1990 *Ethnic Groups across National Boundaries in Mainland Southeast Asia*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Wilai Wongsupchat et al. (ed)
- 1994 *Prachakon khong prathet Thai: Sathiti nai chuong 25 pi* (pho so 2511-2535). Krungthep: Sathaban Prachakonsat, Chulalongkon Mahawiththayalai (『タイの人口25年』).
- WTS (Witthayasat Sangkhom)
- 1992 *Thongthiao Banda Phao yu Lao: Tourist of Ethnic Groups in Laos, Vientiane: Witthayasat Sangkhom* (『ラオス諸民族巡り』).
- Yule, Henry and A.C. Burnell
- 1902 (1886) *Hobson-Jobson: A Glossary of Colloquial Anglo-Indian Words and Phrases, and of Kindred Terms, Etymological, Historical, Geographical and Discursive* (new ed), London: Willam Crooke.

【表 1】 ラオスにおける民族言語集団 (WTS 1992) より筆者作成

1 Lao Thai ラオタイ語族		6
Lao	1,804,101	
Phu Thai	441,479	
Lue	102,760	
Yon	33,240	
Nyang	3,447	
Saek	2,459	
2 Mon-Khmer モン＝クメール諸語族		25
Khamu	391,220	
Bit	1,530	
Lamet	14,355	
Sam Tao	2,359	(Tu Mok)
Sing Mun	2,164	
Phong	10,173	
Thin	13,977	(Lua, lao Mai)
Katang	72,391	
Taoi	24,577	
Pako	12,923	
Lawen	28,057	(Churu)
Katu	14,676	
Ngae	8,917	(Kuriang, Kuliang)
Alak	13,127	
Suwei	49,059	
Ya Hoen	3,960	
Oi	11,194	
La Wae	16,434	
Chleng	4,540	
La Liang	27,665	(Yae=Ta Liang, La wi, Kaseng)
La wi	-----	
Ka Seng	-----	
Oi	11,194	
La Wae	16,434	
Chleng	4,540	

3 Mong-Yao モン・ヤオ語族		2
Mong	231,168	
Yao	18,091	
4 Tibet-Phama チベット・ビルマ語族		4
Ko	58,500	
Phu Noi	23,618	
Kui (La Khuya)	6,493	
Musoe	9,200	(Musoe Dam, Musoe Khao を含む)
5 Wiet-Muang ウィエト・ムアン語族		4
Tum	8,233	
Mon	2,022	
Ngin	998	
Khari	924	
6 Han ハーン語族		1
Han	6,361	

【表 2】調査対象村における 1930-40 年代にかけてのコメ品種

(聴取により筆者作成)

A: GLUTINOUS TYPE 120 varieties including 17 of upland rice

A-1 WET RICE

[A-1-1] "khao do" --- early maturing variety

M019 khao hang hi [5] Lao * "planted especially in the season of rainfall shortage"

M025 khao hing hi (khao ni ni) [1] Lao * "can be cultivated within two months"

M005* khao daeng suwang [1] Lao

M043 khao i tom (khao khi tom) [4] Lao

M068 khao luang kao [4] Kula → Lao、Phuthai+Kaloeng

M010 khao do dam [2] Lao * "khao mak muai noi follows as early maturing variety"

M016 khao do sam duan [2] Lao

M009 khao do daeng [1] Lao

M011 khao do dang [1] Lao * "produced formerly at the paddy in the forest(na khok)"

M012 khao do khao ngu [1] Lao "taste like khao sanpatong"

M013 khao do khi sut [1] Phuthai

M021 khao hom do [1] Phuthai

M027 khao hom nang nuwan [1] Kaloeng

M028 khao hom thong [1] Kaloeng

M032 khao i hao [1] Khmer

M035 khao i nok (throh do) [1] So

M038 khao i pon [1] Lao

M042 khao ii tok [2] Lao * "used to plant in the most unbeautiful paddy land"

M044 khao i tu [1] Lao

M052 khao kap nyang [3] Lao+Kaloeng

M055 khao khao do [1] Lao

M059 khao khi [1] Lao

M062 khao khiao ngu [1] Lao

M063 khao kon bung [1] Lao

M069 khao luk phung [1] Lao

M070 khao ma kham [1] Lao * "it was planted in the paddy lands in the forest"

M071 khao ma yom [1] Phuthai

M079 khao mak muai noi [1] Lao

M083 khao man ngua [1] Phuthai

M084 khao matun dam [1] So

M085 khao mon khai [1] Lao

M087 khao nam pun [1] Lao

M088 khao nam phung [2] Lao * "used to plant in the paddy lands in the forest"

M091 khao nang suan [1] Lao

M097 khao nok kot [1] Phuthai

M102 khao p(l)a kheng [1] Lao

M112 khao phun [1] Lao

M001 khao bak muai [1] Lao

↓

M113 khao pong eo [8] Kula → Lao、Swei * early/medium maturing character

M078 khao mak muai (throh a muai) [8] Lao+Swei

M073 khao mae hang [2] Phuthai+Lao

↓

[A-1-2] "khao kang"--- medium maturing variety

M031 khao i dang [3] Lao

M007 khao dam daeng [1] Lao

M008 khao dam phaa [1] Lao

M015 khao do noi [1] Lao

M022 khao hom klang [1] Phuthai

M031 khao i dang [3] Lao

M033 khao i khao [1] Phuthai

M039 khao i pong [1] Phuthai

M041 khao i tok [1] Lao

M048 khao in tok [2] Phuthai

M053 khao khaen ngu [2] Lao

M056 khao khao nyai [2] Lao

M077 khao mak kham [1] Lao

M101 khao nyai lao [1] Lao

M103 khao pla kheng [1] Phuthai

M104 khao p(l)a lat [1] Lao

M109 khao pho khen [1] Lao

M115 khao ta mai [1] Phuthai

M116 khao tap moei [1] Kaloeng

↓

M081 khao mak pho [1] Lao * medium/late maturing character

M060 khao khi tom [4] Lao

M054 khao khao [2] Lao

M034* khao i mum [6] Lao

↓

[A-1-3] "khao nak <ngan>" --- late maturing variety

M051 khao kam [8] Lao+Khmer+So

M114 khao sethi [3] Lao

M005* khao daeng suwang [1] Lao

M006 khao daeng suwan [1] Lao

M002 khao chanpatong (Khao sanpatong) [1] Lao

M003 khao daeng dok can [1] Lao

M004 khao daeng kon [1] Lao

M017 khao dok du [1] Kula → Lao

M018 khao hang dok [1] Phuthai

M029 khao i dam dang [1] Lao

M030 khao i bu [1] Lao

M057 khao khao khung (khao khao kung) [2] Lao

M058 khao khao thip [1] Lao

M061 khao khi tom khao [1] Lao

M064 khao sanpatong [1] Lao

M065 khao kung [1] Lao * "can grow even in the season of draught as well as flood"

M066 khao ling haet [1] Lao

M072 khao ma yaeng [1] Lao

- M074 khao mae hang nyai(throh ngan mae hang phut: So) [1] So
 M075 khao mae hang noi(throh ngan mae hang koei: So)[1] So
 M080 khao mak nyom [1] Lao → So
 M082 khao mak pho [1] Lao
 M086 khao nam an [1] Lao
 M089 khao nang kuak [1] Kula → Lao
 M090 khao nang nuan [1] Lao
 M092 khao ngan nyai [1] Lao
 M094 khao niao nyai [2] Lao *"not delicious but planted"
 M095 khao noi [1] Lao
 M100 khao nyai (khao i mum) [1] Lao
 M105 khao phla lat [1] Lao
 M106 khao phama [2] Kula → Lao
 M107 khao phama dam [2] Lao
 M108 khao phama khao [2] Lao
 M110 khao phua [1] Lao
 M111 khao phua mia [1] Lao
 M117 khao thip [1] Phuthai
 M118 khao thua lian [1] Phuthai *"the best variety in the past"

[A-1-4] floating rice variety

- M067 khao loi [1] Lao *"not delicious but easy to cultivate"

A-2 UPLAND RICE

[A-2-1] "khao do" --- early maturing variety

- M024 khao hin hi [2] Lao "can be cultivated within two months"
 M093 khao ni ni [1] Lao
 M014 khao do niao [1] Lao *"needed to get sufficient rice when make new paddy fields"
 M020 khao hao [2] Phuthai+Kaloeng *ear plucking among the Kaloeng
 M023 khao hao mak kok [1] Phuthai → Lao
 M036 khao i non (thrau i non: Khmer) [2] Lao+Khmer
 M037 khao i po [2] Phuthai → Lao
 M040 khao i rai (thrau i rai: Khmer) [1] Lao → Khmer
 M045 khao i tui [1] Kaloeng *ear plucking
 M046 khao ibu do [1] Kaloeng *ear plucking
 M076 khao mak hing [1] Kaloeng *ear plucking
 M098 khao non hai [1] Lao
 M099 khao nong du (tharao nong: Khmer) [1] Lao → Khmer

[A-2-2] "khao kang" --- medium maturing variety

none

[A-2-3] "khao nak (ngan)" --- late maturing variety

- M034* khao i mum [1] khmer *"all of the glutinous varieties came from outside"
 M047 khao ibu ngan [1] Kaloeng *ear plucking
 M049 khao ken du [1] Kaloeng *ear plucking
 M050 khao keo ma [1] Kaloeng *ear plucking

B: NON-GLUTINOUS TYPE 32 varieties including 9 of upland rice

B-1 WET RICE

[B-1-1] "khao do" --- early maturing variety

U014 khao chalik (tharao chalik: Khmer) [1] Khmer

U015 khao dok cok [1] Lao → Khmer

U020 khao mali kao (tharao mali: Khmer) [1] Khmer

U021 khao mali do [1] Lao

U023 khao mao mali (tharao mali tae noep: Khmer) [1] Khmer

U026 khao pin kaeo [1] Lao * "rice to sell as like khao dok mali today"

[B-1-2] "khao kang" --- medium maturing variety

U022 khao manphet (tharao klangtia phet: Khmer) [1] Khmer

U027 khao sam phuan [1] Lao → Khmer

[B-1-3] "khao nak (ngan)" --- late maturing variety

U003 khao cao daeng [21] Lao+Phuthai+Kaloeng+So

(khao chao phan thong; khao cao khao pun)

(throh ya daeng: So)

U004 khao cao khao (throh ya klok: So) [4] Lao+So

U007 khao cao kula [3] Kula → Lao

U013 khao cao saen phan [3] Lao

U005 khao cao khi khwai [1] Yoi

U006 khao cao ko kho Jisip sam [1] Lao

U009 khao cao luang [1] Lao

U010 khao cao luk p(l)a [3] Lao

U011 khao cao mae hang [1] Lao

U012 khao cao nga sang (khao nga sang; khao dok ka yom) [1] Lao

U018 khao khao noi [1] Lao

U024 khao nang kham [1] Phuthai

U029 khao ta haeng (khao sai bua) [2] Lao * it needs ample water

[B-1-4] "khao loi" --- floating rice variety

U008 khao cao loi, khao cao loi nam [2] Lao *late maturing type, 4-6m height

U002 khao cao cek soei [1] Lao *planted in the ill-drained land (na nong)

B-2 UPLAND RICE

[B-2-1] "khao do" --- early maturing variety

U016 khao dok fai (thrau phakha krabash: Khmer) [2] Khmer

U030 tharao chaloei phut [1] Khmer

U032 thrau poe [1] Khmer

[B-2-2] "khao kang" --- medium maturing variety

U017 khao hom sawan (thrau hom sawan) [1] Khmer

U019 khao khrap throp [1] Lao → Khmer

U025 khao nang ok [1] Lao → Khmer

U028 khao sathuan [1] Lao → Khmer

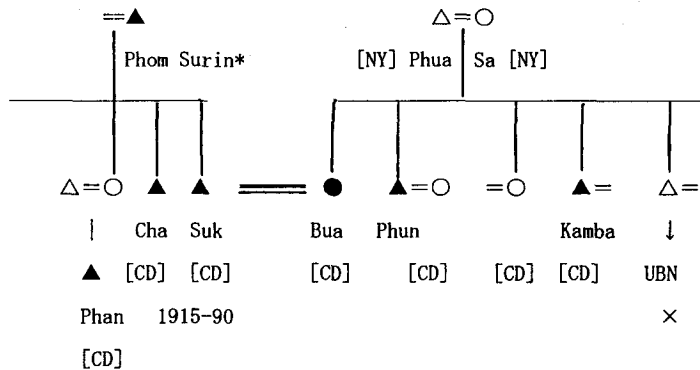
U031 tharao throp thraep [1] Khmer

U033 thrau khuar [1] Khmer *extinct in 1969

[B-2-3] "khao nak (ngan)" --- late maturing variety

none

【図：ナーイ・ホーイの一族例】



*Phom Surin=初代ナーイ・ホーイ／コメ・豚売買、元軍人のち農民

NY; CD=name of village, Cik Du village

【表3】 東北タイの観光局支所設置年 (TAT内部資料より筆者作成)

ナコンラーチャシーマー	1978
ウボン	1987 (後半)
コンケン	1990 (後半)
ウドン	1992
ナコンパノム	1992 (2月署名→7月開所)

註：1995年現在タイ全国で支局総数17。東北タイ全19県で5

：支所開設順序はかつて東北地方が中央当局に掌握された順序に同じ